

一六九 十二月二十七日 在浦潮松村總領事ヨリ
内田外務大臣宛(電報)

來年度露領沿岸漁区競売ニ関スル露國側方針

二付報告ノ件

(十二月二十八日接受)

貴電第三一五号ニ閲シ

漁業長官ニ當業者來浦ニ閲シ談話シタル処出来得ル限り便宜ヲ与フベキ旨ヲ答ヘタルガ其際同長官ハ來年度ノ競売ハ從来ノ如ク願書受付ノ後漁区表ヲ作製シ居リテハ時機ヲ失スルニ付願書受理ヲ為サズシテ從来開設シアル漁区全般ヲ競売ニ附スルコトニ決定セルニ付右ノ趣旨ヲ當業者ニ伝ヘラレ度旨ヲ申出タリ尚又貴電第二六三号中ノ(二)(三)ニ閲シ漁業長官ノ上司タル人民經濟「ソヴィエット」代表者ニ確メタル處之等ハ全部無効トナシ改メテ競売ニ附スルモノナル

旨ヲ回答セリ又往電第四三四号帶納漁区代納入期日ニ閲シテハ二十一日附革命委員会決定第二十四号ヲ以テ極東露領水域ニ於テ今日迄經營セル漁業者ノ滯納漁区代納入期ハ一九二三年二月一日迄ナル旨ヲ發表シ其他ニ閲シテハ何等言及シ居ラザルヲ以テ前記代表者ニ対シ來年度ノ漁業ニ閲スル詳細ナル規定ハ何時頃發表セラルルヤラ質シタル処齊多ヨリ電報アリ次第發表スペキモ近ク「ベリスキ」帰浦スベキニ付同人到着ニ依リ林業其他ト共ニ万事解決スペキ旨ヲ語レリ

註 1 右電報第四三八号ノ写ハ十二月二十八日附機密合第九二八号ヲ以テ永井通商局長ヨリ村上水産局長及酒井露領水產組合組長宛夫々参考ノ為送付セラレタリ

2 「メ」政權ニ於テ本年四月執行セル競売及大正八九年度競売ニ依ル既得權ニ閲スル件

事項九 「カナダ」ニ於ケル本邦移民排斥関係一件

一七〇 二月九日 在オタワ太田總領事ヨリ
内田外務大臣宛(電報)

官有財產上ノ事業ニ東洋人使用禁止ノ B・C

州閣令確認法ヲ不可トスルカナダ大審院ノ裁

定報告ノ件

第五号

(二月十一日接受)
客年往電第一〇九号ニ閲シ

二月七日加奈陀大審院ハ British Columbia 州ハ本件立

法ノ權限ヲ有セズトノ裁定ヲ与ヘタリ

右ニ付司法省ハ未ダ裁定理由書ヲ接受セズトノコトナルモ

新聞紙ノ伝フル所ニ依レバ本件 B・C 州ノ立法ハ British

North America Act 第九十一条竝日英條約法ニ抵触スト

云フニ在リ但シ二名ノ判事ハ反対意見ヲ述ペタル趣ナリ尚

詳細ハ理由書入手ノ上郵報スベシ

晩香坡ニ転電シ倫敦ヘ郵報セリ

註 日本外交文書大正十年第一冊上卷三六六文書

九 「カナダ」ニ於ケル本邦移民排斥関係一件 一七〇 一七一

(附属書)

在ヴァンクーバー斎藤領事ヨリ在オタワ太田總領事宛阿往第七号写

日本入ノカナダヘノ帰化問題ニ對スル係法官
グラント判事ノ意見豹変ノ件

附屬書 同日斎藤領事発在オタワ太田總領事宛阿往第七

号写

公第五三号

(二月十一日接受)

大正十一年二月二十四日

在晩香坡

領事 斎藤 和(印)

外務大臣伯爵 内田 康哉殿

大正十一年二月二十四日付本官発在オタワ太田總領事宛阿往第七号公信写送附

阿往第七号

大正十一年十一月廿四日

在晚香坡

領事 斎藤 和

在オタワ

総領事 太田 為吉殿

邦人帰化ニ対スル係法官ノ意見ノ闇スル件

邦人帰化申請ノ場合ニ於ケル當局者ノ實際取扱振リニ闇ス

ル客年貴電第一四号御電照ニ対シ拙電第二七号ヲ以テ回答

申進置候通り係法官グラント判事ハ当初以来邦人ニ対シ寧

ロ好感ヲ表シ來リタリシガ此程突如別紙甲号写ノ通リ加州
 ニ於ケル邦人ノ状況等ヲ引証シ所詮日本人ハ不同化ナルヲ
 以テ今後容易ニ帰化ヲ許容セザルベキ旨ノ口吻ヲ洩シ居リ
 候数年前同氏ハ日本人ヲ田シテ加奈陀ニ帰化セントベル諸
 外国人中他ニ比類ナキ優秀ナル候補者ナリト推奨公言シタ
 リシ事アリシリ這般氏ノ談話トシテ憮クモ約変的言辞ノ發
 表セラレタル為別紙乙号写ノ如ク態々当地サン紙宛詰責的
 公開状ヲ寄セタル白人モ有之候以上ノ報道ニシテ事實ナハ
 ハリく将来邦人帰化申請ノ場合加同者ノ手心ガ從来リ反シ

頗ル嚴重ト相成可キく想像ニ難カラズ候御参考トシ右通報
 申進候
 本信寫送附先 外務大臣 敬啟

(原稿)

田嶋伊

11月24日 Vancouver Province 論載記事

Extract from Vancouver Province—

Feb. 6th, 1922.

JUDGE GRANT DRAWS LINE AT JAPANESE

"PLACES ONUS OF NATURALIZATION OF
 SEVERAL APPLICANTS ON SECRETARY
 OF STATE.

That Japanese cannot be assimilated by Canada's population but, as a class, live for themselves and by themselves is the view expressed to-day by Judge Grant when asked to recommend a native of Japan for naturalization.

His honor referred to the Japanese question

in California and pointed out that the Orientals were evidently determined to retain their natural traits and customs in a foreign land. The Japanese Californians at the age of six were sent home, he said, and educated in schools and universities of Japan.

Steps were taken to prevent their women from becoming imbued with Occidental ideas, and Japanese daughters and wives were enjoined not to work in American homes, where they might hear of woman suffrage and other "harmful notions".

Several Japanese appeared before Judge Grant, who placed the onus of conferring Canadian citizenship on them upon the Secretary of State. His honor did not hold out much hope they would be naturalized.

A Russian anxious to change his nationality to Canadian encountered a surprise when he was

confronted with a police record after previously denying getting into trouble with the authorities. The application was refused. Precautions are now taken in the cases of certain nationalities to have their credentials and careers investigated by the police and immigration officials."

(原稿)

Nippō

11月24日 Vancouver Daily Sun 論載記事

Extract from Vancouver Daily Sun—

Feb. 11th, 1922.

JUDGE GRANT

"Editor, The Vancouver Sun: Sir—Judge Grant has experienced a remarkable change of heart since 1915. Then he went out of his way to laud the Japanese and tell us that no better candidates for citizenship came before him.

Now he goes out of his way to make derogatory statements of fact which are not true of

九 「カナダ」於ケル本邦移民排斥関係一件 一七一

the Japanese who have adopted Canada. Apart from the manifest incompetency of Judge Grant to speak on this subject, by what right does he assume ever and anon to step out of his jurisdiction and make uncalled for remarks upon matters apart from his judicial duties?

F. R. OXFORD."

一七一 一月二十七日 在オタワ太田總領事ヨリ
内田外務大臣宛

労働組合代表者ノ東洋人排斥立法建議並首相
キング及ルニ「一ノ日本移民問題ニ対スル態
度報告ノ件

機密公第五号

大正十一年一月二十七日

(四月四日接受)

在オタワ

總領事 太田 炳吉 (印)

外務大臣伯爵 内田 康哉殿

加奈陀労働組合代表者ノ東洋人排斥立法建議ノ件

一月二十四日「ヌム、ムーア」ヲ首脳トスル加奈陀労働組

合代表者等ハ首相「キング」ニ面会シテ諸種ノ立法ニ関スル建議ヲ提出シタル處其内東洋人ノ部分的若ハ全般的禁止ニ関スルモノ有ル趣當地方諸新聞ニ報道セラレ居リ是ニ依レバ「トム、ムーア」ハ加奈陀人千人ニ對シ東洋人一人宛ヲ以テ適當ナル割合ナリトナシ首相「キング」ハ之ニ対シ日本人ハ嚴格ナル一定ノ制限下ニ於テノミ入国ヲ許容セラレ居ル旨ヲ語リ同様ノ規則カ支那人ニモ適用セラルニ於テハ「トム、ムーア」ハ満足スヘキヤヲ反問シタル趣ニ有之候

目的ヲ達セサリシモ先是同氏ト会见セル際同氏ハ協商締結ノ当事者トシテ移民ニ関スル日本政府ノ態度ニ非常ニ満足ノ意ヲ表シ居リ候而シテ同氏ハ来ル議会ニ於テハ下院議長タルコトニ略々決定シ居リ從來有力ナル自由党領袖ノ一人ナルヲ以テ其ノ所言ハ或ル程度迄現政府ノ方針ヲ暗示スルモノト見テ差支ナカルヘキカ故ニ前記首相ノ態度ト併セテ本件ニ關スル良好ナル考証材料ト被存候

右何等御参考迄及報告候

本信寫送付先 在晚香坡領事

註 添附ノ新聞切抜省略

一七二 一月八日 在ヴァンクーバー斎藤領事ヨリ
内田外務大臣宛

B・C州ニ於ケル東洋人排斥現況報告ノ件

公第五六号

大正十一年三月八日

在晚香坡

領事 斎藤 和 (印)

当州ニ於ケル東洋人排斥熱ハ客年一月晚香坡選出領代議士

九 「カナダ」ニ於ケル本邦移民排斥関係一件 一七二

「ステイヴィンス」ノ東洋移民ニ関スル談「ウォールド」紙ニ掲載セラレ一月州議会農業委員会ニ於テ東洋人土地問題討議以来漸次高調ヲ示シ排斥ノ声所在ニ勃発排亜専門雑誌「チーンジャー」ノ新ニ出現シタル外諸新聞亦一齊ニ相呼応シテ様大ノ筆ヲ揮ヒ排亜ノ趨勢愈々熾烈ト相成候次第ハ累次報告ノ通ニ有之候処十二月総選挙後排亜関係新聞記事次第ニ減少シ客年十二月末交ヨリ本年一月末頃マデ排亜熱ハ表面稍々冷却シタルヤノ感有之候得共右ハ一時ノ小康ニ過ギズシテ其潜熱ハ依然各地ニ存在シ隨時種々ノ形式ニ於テ發露致居候依テ今新聞記事及其他ノ情報ニヨリ承知シタル該運動ノ情況概要左ニ及報告候 敬具 記

一、加奈陀小売商組合ハB・C州日本人情態ノ調査ニ從事シ二月二十八日「ヴィクトリア」ノ「ドミニヨン、ホテル」ニ大会ヲ開キ席上同支部主催ノ下ニB・C州同組会員ノ総会開会ノ議ヲ討議シ又平原州ノ主要都市ニ東洋人ニ関スル質疑事項ヲ照会シタリシガ「ミニトバ」州首都「ヴィニペグ」市ヨリ対東洋人同運動ニ対シ同情ノ意ヲ表シ來リタル趣ニテ同組合ニ於テハ三月中旬更ニ「ヴィクトリア」ニ会

九 「カナダ」ニ於ケル本邦移民排斥関係一件 一七三

一九八

合議ノ答（二月二十八日会合席上ニ於ケル演説ノ大要ハ別添「コロニスト」^(註)紙上ニ在リ）

二、B・C州製造業者組合ハ四月一日當市「グランヴィル、ストリート」ニ本部移転後產業上ニ於ケル亞細亞人競争問題ノ政究ニ着手スル答

三、「フレーザー、ヴァレー」ニ同地方利益増進ノ為メ「アソシエーテッド、ボード、オブ、トレード、オブ、ゼ、フレーザー、ヴァレー」ト称スル新団体成立セラレタリ而シテ其目的中ニハ東洋人トノ競争ヨリ白人ヲ保護スルコト及日本人ノ同地方定住ヲ制限スルコト等ヲ包含シ三月二十五日「ニューウエスト、ミンスター」ニ於テ集会ヲ催ス由ニテ当日迄ニ日本人ニ閑スル調査資料ヲ蒐集スル趣ナリ

四、「カンバーランド」ニテハ燃料油ノ競争ニヨリ石炭業ノ閉鎖セラレンコトヲ恐レ東洋人坑夫ノ減員ヲ渴望シ地方排亞細亞協会ノ活動ヲ唆シツアリ

五、B・C州伐木労働者ハ亞細亞人ノ競争ニ対抗センガタメ亞細亞人排斥ヲ企図シツアリト

六、B・C州木材小売及仲買業者ハ此冬期中日本人側ヨリ多数ノ輸出向挽材ノ注文ヲ受ケタルモ日本人ハ仕扱惡ク且

出現セザル限リ同会モ自然没落ノ運命ヲ免レザルト観測スル者モ有之候

右申添候
本信写送付先 オタワ

註 別添コロニスト切抜省略

一七四 三月二十三日 在オタワ太田總領事ヨリ
内田外務大臣宛（電報）

力ナダ議会ニ於ケルB・C州選出マクブライ

ド議員ノ東洋人排斥演説大要報告ノ件

第一一号 （三月二十五日接受）

三月二十二日領議会ニ於テB・C州選出進歩党議員

McBride ハ東洋人移民問題ニ閑シ

一、東洋人ハ同化セサル民族ニシテ白人トノ融和ハ遂ニ望ムベカラサルコト

二、一九一〇年B・C州ニ於ケル日本人出生数ハ二〇ニ過キサリシカ一九二〇年ニハ六五七ヲ算スルニ至リ又其ノ出生率ハ一九一〇年ニハ白人出産一千ニ対シ十七ナリシモ一九二〇年ニハ六十九ノ割合トナレルコト

三、学務當局ハ東洋人ノ兒童ハ白人ノ兒童ト分チ隔離学校

九 「カナダ」ニ於ケル本邦移民排斥關係一件 一七四

契約ヲ實行セズ為メニ仲買商等ハ一方鋸木場ニ對シ契約ヲ果サザル可カラザルニ加ヘ他方市況面白カラザル場合ニ多

數ノ擲売ヲ行ハザル可カラザル羽目ニ陥リタルヲ憤リ同業者等ハ日本商ニシテ誠意アルコトヲ立証セザル限り非売同盟ヲ企テ且日本人ノ絶対駆逐ヲ試ミン計画ニテ商業會議所及通商大臣等ニ書面發送ノ準備中ナリト伝フル者アリ

七、在「プリンスルーバート」排亞協會ハ客年十一月閉鎖シタルガ最近再ビ其組織ヲ見会員七十九名ヲ数フ

八、「オーシャン、フォールス」ニ排亞細亞協會組織ナル白人及白人ヲ雇用スル亞細亞人ニ市ノ營業鑑札ヲ下付セザランコトヲ當地市參事會ニ請願シ同会ニテハ之ヲ財政部委員ニ附託シタル由

追而聞ク所ニヨレバ当地排亞協會ハ其後次第ニ財政上困難ノ境遇ニ陥リ昨今銀行ニ於ケル預金僅ニ数十弗ヲ出デズ過般「タイピスト」ヲ解雇スルニ至リ候模様ニ有之且下「ハースト」系新聞ヨリ多少金錢上ノ援助ヲ得シコトヲ欲シ窃カニ交渉中ナルヤノ趣ニテ何レニシテモ近ク外部ヨリ後援ノ

ニ収容スルヲ要スト報告セルコト

四、B・C州ニ於テハ東洋人兒童教育ノ為昨年度ニ於テ六万弗ヲ支出シタルカ該費用ハ白人ノ租税ニ依リ悉ク負担セラルモノナルコト

五、日本人及支那人ノ入国ハ社會ノ道德並労働標準ヲ悪化スルモノナルコト

六、加奈陀ハ一家團欒ノ國タラサルヘカラサルモ東洋人力白人労働者ニ対シ競爭シツツアル間ハ到底之ヲ望ミ得サル実情ナリ

ト述ヘ今期議会ニ於ケル最初ノ排亞演説ヲ試ミタリ

華盛頓桑港及ポートランドヘ転電セリ

一七五 三月二十五日 在オタワ太田總領事ヨリ
内田外務大臣宛（電報）

力ナダ議会下院ニ於ケルB・C州選出議員ノ
日本人排斥演説大要報告ノ件

第一二号 （三月二十七日接受）

三月二十三日B・C州選出下院議員 Alfred Stork ハ同院ニ於ケル演説中東洋人問題ヲ論シB・C州ハ國際親交ノ名目ノ下ニ犠牲ニ供セラルルヲ欲セスB・C州ニ於ケル東

一九九

九 「カナダ」ニ於ケル本邦移民排斥関係一件 一七六 一七七

一一〇

在米大使及晚香坡へ転電セリ

一七六 三月二十八日 在オタワ太田総領事ヨリ
内田外務大臣宛（電報）

B・C州選出力ナダ議会下院議員東洋人移民

排斥ノ動議提出ノ件

第一四号

（三月三十日接受）

洋人問題ハ現在最モ危険ノ状態ニ達セリ東洋人ハ同州ノ鮭漁業ヲ独占シ農業モ亦殆ド其ノ專有ニ帰シ更ニ其ノ手ヲ製材業ニ染メ今ヤ同州実業ノ三割ハ東洋人ノ支配スル所トナリ此ノ儘ニ放擲スルニ於テハ同州白人ハ數年ヲ出テスシテ生業ノ大部分ヲ奪ハルニ至ルヘシ而シテ同州出生率ニ付見ルニ白人ハ千人ニ付十七ナルニ日本人ニ於テハ六十九ナリ加奈陀ハ今ヤ失業問題ニ苦シミ祖國ノ安全ト幸福トノ為ニ歐洲ニ戰ヒタル者カ帰リテ職ナキニ独リ東洋人ハ益々繁栄シツツアルヲ見ルハ快キ事ニ非ス吾人ハ加奈陀ノ資源カ加奈陀人ニ依リテ開発セラレントコトヲ欲スト述ヘ又同州議員 C. H. Dickle ハ Stork の所説ヲ敷衍シ曩ニハ日本人ヲ見ルコト稀ナリシ太平洋沿岸地方ノ鑛詰工場ニ於テ今ヤ日本人ヨリ外見ルヲ得サルニ至レル実情及日本人カ沿岸漁業ヲ支配スルノミナラス魚類ヲ濫獲スルコト並ニ製材業園芸等ニ發展スル事情ヲ述ヘ「シアトル」附近ニ於ケル日本人發展ノ実情ヲ引証シ到底白人力之ト競争スル能ハス将来必ス日本人ニ驅使セラルニ至ルヘキヲ論シ加奈陀政府カ紛争ヲ未然ニ防止スル為速ニ「オタワ」駐在ノ日本代表者ト商議ヲ開始セムコトヲ促セリ

太田総領事ノ依頼ニ依リ左ノ通り転電ス
貴電第一号ニ閑シ帰化邦人ノ待遇問題ニ閑スル交渉ハ仮令裏面ヨリトスルモ極メテ「デリケート」ナルモノナルハ御承知ノ通ナル上本官先般國務次官ニ面会ノ際ノ談話ニ依レハ日本入カ帰化セル後モ依然日本ノ国籍ヲ保有シ居ルコトヲ指摘シ斯ノ如クンハ畢竟紛争ノ種タルヲ以テ何トカ適當ノ処置ヲ施ス必要アリ要言セハ一旦加奈陀ニ帰化セル日本

人ニ對シテハ日本政府ニ於テ直チニ国籍喪失ノ手段ヲ為スコト適當ト思考スト語リ更ニ本官ノ反問ニ對シ目下差掛リタル問題アルニ非サルモ必然問題ヲ誘起スヘキ可能性アルニ付貴官ノ注意ヲ促ス所以ナリト語リ領政府カ本問題ニ對シ漸次深甚ノ注意ヲ払ヒ出シタルヲ感知セシメタルコトアリ尚更本件ニ付談合ヲ始ムルヲ曉諭セシムル次第ナルニ付適當ノ機會ヲ見出サハ勿論何分ノ尽力ヲ辞セサル積ナルモ差当リノ方策トシテハ漁者慈善団体ニ於テ英國臣民ノ立場ヨリ法律家又ハ適當ノ筋ニ依頼シ差別待遇撤廃ノ途ヲ講スルコト必要ト思考スルニ付御見込ニ依リ此ノ旨當業者ニ説

示セラレソコトヲ希望ス

第八号

（四月三日接受）

第一五号

（四月五日接受）

往電第五号ニ閑シ
一七八 四月一日 在オタワ太田総領事ヨリ
内田外務大臣宛（電報）
官有財産上ノ事業ニ東洋人使用禁止ノB・C
州閣令確認法ヲ認可セザル旨總督ヨリB・C
ノ件ニ付太田総領事ヨリ返電ノ件

第一五号
（四月五日接受）
領政府司法大臣ハ大審院ノ裁定ニ基キB・C州ニ立法ヲ否認センコト Disallow ヲ總督ニ上申シ枢密會議モ右上申ニ同意セルニ依リ總督ハ三月三十一日之ヲ裁可セリ因ニ右司法大臣及枢密會議決定書中ニハ其写ヲB・C州知事及日本總領事ニ送附スヘキ趣ヲモ記載セラレ居リ四月一日附以テ枢密書記官ヨリ本官ヘ之ヲ送附シ來レルニ依リB・C州知事ニ對シテモ同様ニ取計ヒ否認ノ通告ヲ為セルモノト思ハル委細郵報
在晚香坡領事ニ転電シ在英大使ニ郵報セリ

一七九 四月六日 在ヴァンクーバー斎藤領事ヨリ
内田外務大臣宛

九 「カナダ」ニ於ケル本邦移民排斥関係一件 一七八 一七九

一一〇

九 「カナダ」ニ於ケル本邦移民排斥関係一件 一七九

日本人帰化申請ヲ拒否セル係法官グラント判

事最近ノ取扱振報告ノ件

附屬書 同日斎藤領事在オタワ太田總領事宛阿往第一

八号写

右ノ件

公第九五号

大正十一年四月六日

(五月三日接受)

在晩香坡

領事 斎 藤 和 (印)

外務大臣伯爵 内田 康哉殿

公信写送付ノ件

在オタワ總領事宛阿往第一八号拙信写一通及送付候 敬具

(附屬書)

四月六日斎藤領事在オタワ太田總領事宛公信阿往第一八号

写

阿往第一八号

大正十一年四月六日

在晩香坡

領事 斎 藤 和

在オタワ

歐洲大戰勃発ニ当リ独國ヨリ独逸國民トシテ召集セラレタルコトヲ説キタル後

四、帰化ヲ日本人ニ許可スルコトノ危険ヲ見ズヤ本官ハ加

州ヨリ予ニ送り来レル摘要書写ヲ添ヘテ本件ヲ國務大臣ニ

申報セリ若シ國務大臣ニ於テ右説了後尚是等人民ニ帰化ヲ

許可セント命ズルナランニハ本官ハ之ニ從フベシ

五、サレド本官ハ日本人ヲ善良ナル加奈陀人ト成スコトヲ

得ベシト信ズル能ハザルヲ以テ現職ニ在ル限り帰化許可反

対ノ旨ヲ申報シ國務大臣及政府ニ之レガ責任ヲ委スベシ云々

右及報告候

敬具

追テ本件ニ關スル四月五日ウォールド紙社説切抜及添送候
送付先 外務大臣

註 社説切抜省略

一八〇 四月十一日 在オタワ太田總領事ヨリ
内田外務大臣宛

B・C州閣令確認法否認ニ關スル總督令写送

付ノ件

附屬書 四月一日枢密院書記官補ヨリ太田總領事宛書

九 「カナダ」ニ於ケル本邦移民排斥関係一件 一八〇

総領事 太田 為吉殿

邦人帰化取扱ニ對スル係法官最近態度ニ関スル件

本件ニ關シテハ去ル二月二十四日附阿往第七号ヲ以テ新聞所報ニ係ル当地係法官ノ意見豹変ニ關シ及報告 候處昨五

日當地ウォーレンド紙ハ係法官グラント判事ガ本月四日帰化法廷ニ於テ邦人出願者ニ對シ残ラズ帰化拒否ノ裁決ヲ与ヘ

タル旨ヲ報ズルト共ニ当日法廷ニ於テ同判事ノ為シタル所論及質問等ヲ報ジ一層同判事最近ノ態度ヲ明瞭ニ致居候今其大要ヲ摘記スルニ

一、出願者ハ日本ノ法律ニ拠ルトキハ帰化後モ尚日本臣民タルコトヲ知レルヤ帰化出願日本人ハ日英間ニ戰爭起レル場合英國ニ反抗シテ日本ノ為メニ戰ハザル可カラズ否ラザレバ日本國ヨリ反逆罪トシテ処刑セラルルノ危險ヲ冒サザル可カラザルヲ知レルヤラ問ヒ

二、次ニ予ハ本來ノ国籍ヲ喪失シ得ザル日本人ガ加奈陀ノ善良ナル國民ト成ルコトヲ期待シ得ベシト信ズルヲ得ズト自家ノ意見ヲ述べ

三、更ニ二十五ヶ年間英國ニ居住シ英國籍ヲ有セル人民ガ

公第七一号 在オタワ 総領事 太田 為吉 (印)
(五月四日接受)

大正十一年四月十一日 在オタワ 総領事 太田 為吉 (印)

外務大臣伯爵 内田 康哉殿

B・C州閣令確認法否認ニ關スル總督令写送付ノ件

加奈陀領政府ガ州政府ノ立法ニ對シ否認權ヲ行使スルハ領政府對州政府間政治的關係ノ極メテ「デリケート」ナル事

情ニ鑑ミ領政府ノ容易ニ実行ヲ敢テセザル所ナルハ既ニ御承知ノ通ニ有之候

然ルニ本件從來ノ行掛リ上領政府ハB・C州ノ立法ヲ不問ニ附シ去ルヲ得ズ遂ニ客年十二月十五日右B・C州立法ガ州ノ權限超越ノ行為ナラザルヤ否ヤラ大審院ニ諮詢スルニ至リ大審院ハ之ニ對シ本年二月七日裁定ヲ下シタルコトハ拙電第五号ノ通ニ有之候

九 「カナダ」に於ケル本邦移民排斥関係 1件 110

而シテ右大審院ノ裁定ニ基キ領司法大臣「ヤー・ヒー・マーチン」
トシテ「B・C州立法ハ否認ヤムロトテ総督ニ上申ハ
内閣枢密會議セリノラ協賛セル」ミリ総督ハ「ヨルヒト」
右否認処分ヲ裁可スルニ至リタルヲ以テ不取敢拙電第十五
号ヲ以テ及報告置候仍テ右枢密書記官ヨリ本官へ送付越
追而大審院ノ裁定理由書ハ成ル可ク速ニ入手シタキ並同
法次官ハ申込置候ヤ印刷甚延セル趣ハ以テ漸々今般右理
由書並ハ「B・C州検事総長対伐木業者間係争事件」対ベ
ル裁定理由書送付越候處日本人会弁護士「エ・ア・ギー」出
く先之既ニ右写ヲ入手シ在晩香坡領事ハ回氏ヨリ貴受ハ
上貴大臣へ送付セル趣ニ付本官入手ハ写ハ在英大使リハ
「送付致シ候条右ニ御承知相成度候

本信写送付先 在英大使 在晩香坡領事

(藍墨軸)

四月一日本松密院書記官補ヨリ太田総領事宛書翰写

「B・C州閣令確認法否認ハ総督令写送付ハ件

Privy Council

(藍墨軸)

「B・C州閣令確認法否認ハ「ヨルヒト」
P. C. 743

Certified copy of a Report of the Committee
of the Privy Council, approved by His Excellency
the Governor General on the 31st March, 1922.

Privy Council

CANADA

The Committee of the Privy Council have had
under consideration the annexed report from the
Minister of Justice, dated 27th March, 1922, recom-
mending, for the reasons therein stated, that
the Statute of the Legislature of British Columbia,
Chapter 49, assented to on the 2nd day of April,
1921, and received by the Secretary of State of
Canada on the 18th day of April, 1921, intitled
"An Act to validate and confirm certain Orders
in Council and provisions relating to the employ-
ment of Persons on Crown Property", be disallow-

丸 「カナダ」に於ケル本邦移民排斥関係 1件 110

CANADA

OTTAWA, Ont., 1st April, 1922.

Sir,—

I have the honour, by direction, to forward
you, herewith, copy of Order-in-Council, P. C.
743, of the 31st March, 1922, respecting the dis-
allowance of Chapter 49 of the Statutes of British
Columbia, being "An Act to validate and con-
firm certain Orders in Council and Provisions re-
lating to the employment of Persons on Crown
Property."

I have the honour to be,

Sir,

Your obedient Servant,

(Sgd) G. G. Kezar
Asst. Clerk of the Privy
Council

The Japanese Consul General
Ottawa, Ont.

ed.

The Committee concur in the views of the
Minister of Justice as set out in the said report
and advise that the said Act be disallowed accord-
ingly.

The Committee, on the recommendation of
the Minister of Justice, further advise that a
copy hereof and of the accompanying report, if
approved, be transmitted to the Lieutenant Gov-
ernor of British Columbia for the information of
his Government, also that a copy be transmitted
to the Japanese Consul General at Ottawa.

All of which is respectfully submitted for Your
Excellency's approval.

(Sgd.) G. G. Kezar

Asst. Clerk of the Privy Council.

(藍墨軸)

丸 「カナダ」に於ケル本邦移民排斥関係 1件 110

Privy Council

CANADA

DEPARTMENT OF JUSTICE

CANADA

OTTAWA, 27th March, 1922.

TO HIS EXCELLENCY

THE GOVERNOR GENERAL IN COUNCIL:

The undersigned, referring to Chapter 49 of the Statutes of the Legislature of British Columbia, assented to on 2nd April, 1921, received by the Secretary of State for Canada on 18th April, 1921, and entitled "An Act to validate and confirm certain Orders in Council and provisions relating to the Employment of persons on Crown Property", has the honour to report that in view of correspondence exchanged with the Attorney General of British Columbia Your Excellency in Council did by Order of 12th November last, pursuant to the authority of Section 60 of the Su-

last, "the answer of the court to the first question submitted by His Excellency the Governor General is in the negative. It is therefore unnecessary to answer the second question. Idington J. dissenting: Brodeur J. dissenting in part."

It thus appearing that the legislature had no authority to enact the statute in question the undersigned recommends that the said statute be disallowed, and that a copy of this report, if approved, be transmitted to His Honour the Lieutenant Governor of British Columbia and to the Japanese Consul-General at Ottawa.

Humbly submitted
(Sgd) Lomer Gouin
Minister of Justice.

1104-1 国内1111件 在オタワ太田総領事事務
内田外務大臣宛(電報)

カナダ在留日本人問題ノ参考資料ヲハハケ
相成ルムハニ一議長ニ提供ノ血報書院興化日本
六 「カナダ」於ケル本邦移民基法關係 1 件 110

preme Court Act, refer to the Supreme Court of Canada for hearing and consideration the following questions:—

1. Had the Legislature of British Columbia authority to enact Chapter 49 of its statutes of 1921, entitled "An Act to validate and confirm certain Orders in Council and Provisions relating to the employment of Persons on Crown Property?"
2. If the said Act be in the opinion of the Court *ultra vires* in part, then in what particulars is it *ultra vires*?

and that these questions having been submitted to the Court, counsel were duly heard thereon on behalf of the Attorney General of Canada, the Attorney General of British Columbia, the Japanese Association of British Columbia and the Shingle Agency of British Columbia, and the matter coming on for judgement on 7th February

人問題ノ方當川付請請ノ件

(国際1114件勘定)

抽電第1回即ち輪ノ本官宛在晩香坡領事宛往電第10号長段ノ題△

四月二十九日 McQuarrie トスニ於ト King 河原ハ安ハ東洋移民問題協議ノ由取リ確定方ヲ請求シ首相ガ五月一日(月曜)ニ促ヘ度キ由ラ答フルヤ本人ハ本件ニ就テハ隨分発言者多キ見込ニヤトアリ旁五月八日ニ定メラシ度シト希望シ政府ノ閣スル限り異議無キ由ハ応答ヲ得タルガナヨリ先本官ハ早晚日本問題が議セハル可キヲ予想セルニ依リ去ル十八日晚餐招待旁首相ヲ議會ニ訪問シ在加奈陀日本人問題参考材料トシテ当館ニ於テ取纏メタル諸統計ヲ手交セル處首相ハ一見ハ上実ハ一週間後ノ月曜日ニ東洋人問題ヲ議會ニナリトナリ既リ其材料ヲ求ムルニ此カ窮シ居ル折柄幸ナリト大ニ感謝セラシタリ依テ本官ハ更ニ転シト議長Le-mieux 氏ヲ訪問シ其ノ敵父ハ逝去(本月上旬「ヤハムニオーネ」市ニ於テ葬儀アリ當時花環ヲ贈り置ケリ)ニ次ハ直接面晤申辞ハ尙ブル傍首相訪問ノ事ヲ語リタルニ同氏ハ此ノ頃B・C州議員ニ東洋人問題ニ付意見ノ交換ヲ迫リ

九 「カナダ」ニ於ケル本邦移民排斥関係一件 一八一

二〇八

居ル事情ナルガ貴下ノ首相訪問モ矢張該問題論議ノ為ナリ
シヤト質問セルニ依リ別ニ論議セルニ非ズ此ノ頃本官参考
ノ為統計ヲ調製セルニ面白キ事実ヲ發見セルニ依リ首相ノ
参考ニ供シタル迄ナリト語レル処同氏ハ自分ニモ是非一部
送リ吳レズヤ実ハ一両日中ニB・C州選出代議士Neil氏
該問題論議ノ為來訪スルコトナリ居ルニ付出来得ベクン
バ二十日迄ニ右ヲ得タシトノコトナリシニ依リ快諾ヲ与ヘ
同日之ヲ届ケ置キタリ而シテ右統計ハ一昨年ノ國勢調査ノ
際晚香坡領事館及當館ニテ作製ノ年齢別男女別所有及借地
面積並此等ト加奈陀人トノ関係及面積等ト比較セルモノノ
外一九〇八年以降ノ出入日本人數及渡航労働者數並保守党
内閣移民大臣Calder氏ノ議會ニ於ケル在住日本人減少ニ
関スル言説ヲ集メタル上當國政府年報ヨリ得タル日本人ノ
帰化數表ヲ附加シタルモノナル處此最後ノモノニ依レバ帰
化數ハ一九二〇年迄ニ總計七、七二三人トナリ之ニ一九一
五年ヨリ一九年迄ノ出生者三、六九二人ヲ加フルトキハ一
一、四〇〇余人トナルガ故此數及一九一五年以前ノ出生數
(之等ハ不明)ヲモ加算セバ仮令帰國者及死亡者ノ數ヲ相
當ニ見積リ差引スルモ依然一万一千人位ハ加奈陀ニ向ツテ

参考ニ供シタル迄ナリト語レル処同氏ハ自分ニモ是非一部

其国籍ヲ主張シ得ベキ日本人アル見込ナルト共ニ本官ノ右
統計ニ期待セル所ハB・C州議員等ノ多年喧囂スル所謂日
本人問題ナルモノハ結局帰化日本人問題ニシテ加奈陀人ガ
自國人ノ或者ニ公平ノ待遇ヲ与へ且國際的ノ意義アル真ノ
日本人問題トスルモ人口及關係面積ハ殆ド議スル(脱)微
細ノモノナルコトヲ示スニアリ首相ニ面会ノ際簡単ニ之ヲ
附言シ尚右帰化人ニ関スル部分ニ就テハ曩ニ或ル宣教師ノ
質問ニ對シ回答セル私信ノ写ヲ公表セザル舍ミノ下ニ其ノ
参考ニ供シ置キタリ

思フニ加奈陀ニ於ケル帰化人問題ハ彼我双方ニ於テ研究ヲ
重ネタルモ格別発展スル所無ク今日ニ至リタル如キモ多数
ノ日本人ハ單ニ生業ノ方便トシテ帰化スルモノニシテ国籍
変更ニ伴フ重大ノ責任ニ至リテハ更ニ之ヲ諒解シ居ラザル
如キ事実ハ當國政府當局ノ漸ク悟ル所トナリ最近晚香坡地
方裁判所判事ノ如キハ向後絶対ニ日本人ニ帰化ヲ許サザル
ノ方針ヲ述べ中央政府ノ注意ヲ喚起シ居レル事実アリ(四
月六日附晚香坡領事來信阿往第一八号)又過般國務次官ガ
地方官庁ヨリ日本人ノ帰化ニ付種々稟申シ来ル者アルヲ暗
示シタル上ニ重国籍ヲ防グ必要アルヲ語リ(在晚領事転電

同領事宛拙電第三号^(註1) 帰化權ヲ與ヘタル際其人名ヲ通知シ
日本ニ於テハ之ニ依リ国籍喪失ノ处分ヲ行フコト出来間敷

キヤ此ノ点ニ就テハ曾テ矢田總領事ト往復セルコトアルモ
要領ヲ得ズシテ終レリ尚貴官ノ研究ヲ促スト語リタルコト
アリ然而當館記録ニ依レバ大正七年十二月中在晚領事ノ請

訓ニ對シ貴電第一七号^(註2)ヲ以テ回訓ヲ與ヘラレタルコトアリ

該電訓ノ含蓄ヨリセバ帰化人ニ就キ一々通知ヲ受クルハ我
政府ノ希望ニ非ザルヤニモ見受ケラレ矢田總領事ノ措置ハ

其ノ以前ノ事ナリシトハ言ヘ又或ハ此ノ辺ノ理由ニ依ルモ
ノカト想像セラルモ帰化人問題ハ當國政府内ノ問題トナ

リ居リ永ク曖昧ニナン置クヲ許サザルニ付我ニ於テモ早晚
態度ヲ定ムル必要生ズベシト思考セラル本省ニ於テモ此際

研究ヲ進メラレ度シ尚本官ノ見ル所ニ依レバ前記次官ノ言
ノ如ク帰化人名ヲ通知シ日本国籍抹消方ヲ提議スル如キコ
トアラバ少クモ之ニ応ズルハ當然ニシテ且又物議ヲ防止ス
ル上ヨリ必要ノ事ト信ズル次第ナルガ此ノ点ハ本省ノ御方
針ハ至急承知シタキニ付何分ノ儀折返シ御電訓ヲ請フ

在晚領事ニ転電セリ

註1 太田總領事宛在ヴァンクーバー領事第三号ハ前掲在
九 「カナダ」ニ於ケル本邦移民排斥関係一件 一八二

第八号 貴電第十八号末段ニ閔シ帰化問題ニ閔スル本邦政府ノ態度
ハ国籍法並ニ大正七年十二月在晚香坡領事宛往電第十七号^(註3)
ニヨリ明瞭ナリト思考スルモ不明ノ点アラバ再電アレ尙前
記往電中ニハ我政府ガ帰化ニツキ一々通知ヲ受クルコトヲ
好マザルガ如キ意味ヲ含蓄シ居ラズ又国籍法二十四条ノ例
外規定削除ノ問題ナラバ政府ニ於テ予メ何等明言スルヲ得

九 「カナダ」ニ於ケル本邦移民排斥関係一件 一八三

一一〇

註 大正七年十二月内田外務大臣発在ヴァンクーバー浮田領事宛電報第一七号ヲ附記ス

(附記)

大正七年十二月内田外務大臣発在ヴァンクーバー浮田領事宛電報第一七号

日本人ノ帰化問題ニ対スル日本政府ノ態度回訓ノ件

第一七号

貴電第四〇号ニ閲シ左ノ通り貴地 County Court Judge, Grantへ回答アレ

一、帝国政府ガ其ノ臣民ニ対シ加奈陀政府ノ発給シタル帰化証ヲ認メズト云フハ何等カノ誤解ナラン加奈陀ニ帰化シタル者ハ他ノ外国ニ帰化シタル者ト同ジク国籍法第二十条ニ依リ我國籍ヲ失フ

二、尤モ滿十七年以上ノ男子ニ付テハ同法第二十四条ノ例外規定アリ同条ニ該当スル者ハ外國ニ帰化スルモ我國籍ヲ失ハズ然レドモ之等在外日本人ニ対シ兵役ニ服スル為

帰國ヲ強制スル特別ノ法規ナシ却ツテ現行徵兵令ハ歐米諸国ニ在留スル者ハ本人ノ願ニ依リ三十二才(改正法律ニ依レバ三十七才)迄徵兵ヲ猶予シ同年ヲ過ギタル者ハ

国民兵役ニ編入スルコトヲ規定セリ

三、延期願ヲ為サズシテ身体検査ヲ受ケザル者ハ徵兵令ニ依リ三円以上三十円以下ノ罰金(改正法律ニ依レバ百円以下ノ罰金又ハ三円以上ノ科料)ニ処セラル然レドモ歐米諸国在留者ニ在リテハ本人自ラ帰国セザル以上刑ノ執行ハ事實上不可能ナリ
尚前記貴電末段ニ閲シ目下格別貴官ヨリ進シテ帰化証下付人名ノ通知方ヲ請求スルノ必要ヲ認メザルモ先方ヨリ之ガ通知ヲ受クルカ又ハ其他ノ方法ニ依リ職務上日本国籍ヲ失ヒタル者アルコトヲ知リタル場合ハ貴官登録簿ヨリ本人ノ氏名ヲ抹消シ且戸籍法第三十九条第三項ノ通知手続ヲ執ラルベシ

一八三 五月一日 在オタワ太田總領事ヨリ

内田外務大臣宛(電報)

日本移民ニ閲スル諸事項及日本ニ於ケル力ナ

ダ人ノ権利享有ニ閲シ前内閣農務大臣 Tol.

bieヨリ質問提起ノ件

第二五号 (五月三日接受)

前内閣農務大臣 S. F. Tolmie 氏ハ四月十日日本移民ニ

関スル諸事項ノ外土地所有、商業、漁業、航海業、鉱山

業、農業等日本人ガ加奈陀ニ於テ享有シ得ル権利ヲ加奈陀人ハ日本ニ於テ如何ナル制限ノ下ニ享有シ得ルヤトノ質問ヲ提起シ居リ五月一日ノ議場ニ於テ之ニ対スル總理大臣ノ答弁ヲ催促シタル處「キング」首相ハ加奈陀人ノ日本ニ於ケル土地所有權取得問題ニ付テハ英國外務省ニ照会中ナル

モ或ル事情ノ為ニ未ダ回答ニ接セズ質問者ニ答フルヲ得ザルモ成ル可ク早ク回報ヲ得ル様尽力スベシト答ヘタリ
在晩香坡領事ヘ転電セリ

事ノ意見是正方取計アリタシ尚本件ニ閲シテハ大正七年十一月往電第十七号^(金)参照アレ

註 大正七年十二月往電第十七号ニ付テハ前掲四月二十九日内田外務大臣発在「オタワ」太田總領事宛電報第八号ノ附記

参照

一八四 五月五日 在オタワ太田總領事ヨリ

内田外務大臣宛(電報)

トルミー質問ノ日本移民ニ閲スル諸事項及日

本ニ於ケル力ナダメ人ノ権利享有ニ付キング

相ノ回答要旨報告ノ件

(五月十日接受)

帰化拒否サレタル日本人ハ国籍法第二十四条

ノ例外規定ニ該当スルヤ查報方及グラント判

事ノ意見是正方訓令ノ件

第四号

客月六日付貴信公第九五号ニ閲シ

帰化拒否ノ裁決ヲ与ヘラレタル日本人ハ凡テ国籍法第二十四条例外規定ニ該当スルモノナリシヤ查報アレ前記規定ニ

該当セサル者ハ外國ニ帰化シタルトキハ同法第二十条ニ依リ我國籍ヲ失フモノナルニ付適當ノ方法ヲ以テグラント判

九 「カナダ」ニ於ケル本邦移民排斥関係一件 一八四 一八五

内田外務大臣ヨリ
在ヴァンクーバー斎藤領事宛(電報)

一八五 五月七日 在オタワ太田總領事ヨリ

内田外務大臣宛(電報)

往電第二五号「トルミー」ノ質問ニ対シ首相「キング」ハ五月五日書面ヲ以テ大要左ノ通り回答セリ

一、日本人移民ノ加奈陀入國ニ閲スル規定

千九百八年日加間ニ締結セラレタル「ルミュー」協約ニ基キ日本政府ハ自発的ニ日本移民ノ加奈陀移住ヲ比較的の少數ニ制限ス

(イ) 加奈陀人ハ一般外国人ト同様日本ニ於テ土地所有權利ヲ享有シ居レリヤ

二、日本ニ於ケル加奈陀人ハ如何ナル制限ノ下ニ諸種ノ権利ヲ享有シ居レリヤ

九 「カナダ」ニ於ケル本邦移民排斥関係一件 二一一

九 「カナダ」ニ於ケル本邦移民排斥関係一件 一八六

ナシ但日本法律ニ依リ法人ヲ設立スル場合ハ此ノ限りニ非ズ

ズ

開港場ニ於ケル旧外国人居留地ニ於テハ永代借地権ヲ享有一シ得可ク又地上権及永代小作権者タルヲ得可シ

(ロ) 外国人ハ日本ニ於テ選挙権ヲ有セズ

(ハ) 加奈陀船舶ハ日本ニ於テ沿岸貿易ニ從事スルヲ得ズ及日本国旗ヲ掲揚スル船舶ノ所有者タルコトヲ得ズ但加奈

陀人モ日本船舶ヲ所有スル合資会社株式会社及株式合資会社ノ社員タルコトヲ得

(ニ) 加奈陀人ハ日本ニ於テ鉱山業ニ從事スルコトヲ得ザルモ日本法律ニ依リ法人ヲ設立スルニ於テハ此ノ限りニ非ズ

(ホ) 加奈陀人ハ日本銀行朝鮮銀行南満鐵道会社東洋拓殖会社及其他二、三ノ会社並政府ノ補助金ヲ受クル汽船会社ノ株主タルコト取引所ノ仲買人タルコト商業會議所ノ議員タルコトヲ得ズ又日本移民事業ニ從事シ又ハ移民会社ノ株主タルコトヲ得ズ

(ク) 外国人不熟練労働者ハ旧外国人居留地並雜居地以外ニ於テハ行政官厅ノ許可ナクシテ從業スルヲ得ズ但僕婢料

一一一

理人給仕人ノ如キ家内労働者ハ此ノ限りニ非ズ

三、日本移民ノ加奈陀入国数

右ニ閏シテハ千九百十二年四月一日ヨリ千九百一十一年三月ニ至ル十年間各会計年度ニ於ケル日本人入国数ヲ挙ゲ更ニ男女小兒ニ分類シテ各其數ヲ挙ゲ別表ニ於テ日本労働者ノ毎会計年度ニ於ケル入国数ヲ挙ゲタリ

四、最近十年間ニ於ケル日本人ノ加奈陀出国数右ニ閏シテハ加奈陀政府ノ蒐集セル統計ヲ以テ日本政府ノ毎月刊行セル報告ニ依ル趣ヲ述べ千九百十二年ヨリ千九百二十二年ニ至ル十年間会計年度ニ於ケル出国数ヲ示セリ

五、一旦帰朝セル日本人ニシテ加奈陀ニ再入国セル者ノ數再渡航ノ日本人數ハ同種類ノ外国人數ト一括シテ統計ヲ作製セラレ居ルニ依リ特ニ日本人ノミニ閏スル統計ナン

在晚香坡領事ヘ転電セリ

一八六 五月九日 在オタワ太田総領事ヨリ
内田外務大臣宛(電報)

カナダ下院ニ於テ東洋人移民排斥ノマク力リ
一決議案ヲ修正ノ上可決ノ件

別電 同日太田総領事発内田外務大臣宛電報第一八

号 号

右決議文
(五月十日接受)
往電第一八号 McQuarrie ノ決議案ハ愈々五月八日討議セラルルコトナリ同日午後三時半ヨリ九日午前一時四十五分迄議事ヲ繼續シ政府側ヨリ該決議案ノ securing the exclusion of future immigration of this type ナル文句中 exclusion ワ代ハニ effective restriction ナル文字ヲ以テ政府側修正案ヲ可決セリ右不取敢

決議全文別電第一八号ノ通り
在英大使及在晚香坡領事ヘ転電セリ
(別電)
五月九日太田総領事発内田外務大臣宛電報第一八号
東洋人移民排斥決議案修正文
第一八号別電
(五月十日接受)

That, in the opinion of this House, the immigration of oriental aliens and their rapid multiplication is throwing a serious menace to living

九 「カナダ」ニ於ケル本邦移民排斥関係一件 一八七

一一一

ニ閑シテハ旧来ノ敵密ナル制限方針モ何等ノ効果無キヲ以テ絶対禁止ノ外無シト説キ日本人ニ閑シテハ千九百七年ノ Gentleman's agreement 有ルモ内容秘密ニ付セラレアリスル秘密協定ヲ有スルベ吾人ノ好マザル所ナルヲ以テ早速之ヲ破棄スベシト為シ日本ハ區別待遇ヲ憤慨スルモ日本

一一一

ハ加奈陀人ニ対シ日本人ガ加奈陀ニ於テ享有スルヨリモ狹隘ナル権利ヲ与フルニ過ギズ現ニ British Columbia ニ入込メル日本人ノ数ハ予想以上ニ多ク且其ノ出生率ハ非常ニ大ナリ而シテ日本人ハ既ニ広大ナル農地ヲ有シ盛ニ伐木ヲ営ミ漁業ハ独占シツアリトテ日本人ガ加奈陀ノ将来ニ対スル脅威ナルヲ力説シ各地ニ於ケル諸種ノ組合、協会、市会、商業會議所等ノ排亜細亞人決議文ヲ読上ゲ最後ニ東洋移民ヲ禁止スベキ理由トシテ(同化セザルコト)生活ノ程度低キコト(帰化ニ拘ラズ旧国籍ヲ留保スル)以テ善良ナル加奈陀人トナリ難キコト等八ヶ条ヲ挙ゲ之レガ対策トシテ(加奈陀ノ閑スル限り日英通商條約廢棄ノ通告ヲ為スコト)紳士協約ヲ破棄スルコト(移民法ヲ改正シテ東洋移民ノ入国禁止ヲ規定スルコト)三方法ヲ採用スルノ必要ナルヲ説キタリ

右ニ付十数名ノ議員(主トシテ British Columbia 出身 Alberta, Yukon 外一名)交々立テ類似ノ排東洋人論ヲ述べ之レニ次テ British Columbia 州名代ノ排田家 Neil H.米国加州議会排日決議ヲ引用シテ東洋人排斥ノ理由ヲ語リ且日本ノ支那人労働者入国禁止勅令ヲ指摘シ加奈陀ガ入

國ヲ禁止スルモ日本ハ故障ヲ入ルル理由ナク又日加間ノ紳士協約ガ入国数ヲ四百人ニ制限スルモ日本移民ハ各種ノ方法例ヘバ写真結婚ノ如キヲ以テ回避スルガ故ニ到底効力ナキヲ以テ結局「ナタール」、新西蘭、濠洲ト同様ノ排斥法ヲ作ル必要有ルコトヲ極力主張シ又 Stevens ケ千九百七年及八年ノ英國議會議事録ヨリ當時ノ殖民大臣 Lord Lyttleton ケ Statement 其他千八百九十八年七月 Aberdeen 総督宛殖民大臣 Chamberlain 氏ノ書翰ヲ引用シ加奈陀ガ日英條約ニ加入ノ際移民制限保留ノ権利ヲ有セルハ英國政府ノ認容ヲ得居ル所ナルヲ論ジ「ネイル」同様排斥法ノ採用ヲ力説シタルガ首相「キング」氏ハ之等ニ答フル為要左ノ論述ヲナセリ

抑本問題ハ單ニ地方的問題ニ非ズ英帝国全般ニ關係スル問題ナルト同時ニ兼ネテ國際的大問題ナルガ故ニ党派ノ観念以外ニ立チ慎重審議セザルベカラズ而シテ余ハ提案者ガ本問題ヲ主トシテ經濟的ノモノトスル点ニ全然同意ス又吾人ハ兩洋人種間ニ於テ同化ガ不可能ナルコトモ認メザルヲ得ザル結果ト思フ移民ノ集合ハ遂ニ加奈陀ノ人種的合一ヲ蒸シ社會上産業上ノ不安ヲ來ス虞アルガ故ニ東洋移民ノ入來

ヲ有効ニ制限スルノ必要ヲ認メ之ガ為ニ最善ノ手段ヲ尽スハ政府ノ責務ナリト信ズ尤モ提案者ハ印度人ニ就キ述ブル所ナキモ日本人支那人ノミナラズ右ハ印度人ニモ適用スルノ必要アリ而シテ支那人ニ就テハ以前自由党内閣時代余ハ自身上海ニ派遣セラレ支那政府ト交渉ノ結果旅券ニ依リ同国人ノ渡航ヲ制限スル方法ヲ支那ト締約セントシタルガ同内閣変更ノ為遂ニ果サザリシモ現内閣ハ其意ヲ受ケ同様ノ方法ヲ講ジ既ニ談判ヲ再開スル手段ヲ講ジタリ次ニ日本人問題ニ就キ上院ニ在ル議員ハ十二ヶ月ノ予告ヲ以テ條約廃棄ノ通告ヲ為サント主張シタルモ如斯方法ヲ講ズルニ当リテハ先以テ之ニ依リテ生ズル利害得失ヲ講究セザルベカラズ而シテ政府ハ近頃西部地方ヨリ東洋貿易増進ノ為種々ナル請願ニ接シ居リ同地方ノ利害ヨリ考フルモ彼此対照研究ノ要アリ且又現行条約ニハ論者ノ言ハガ如ク

Nothing in the said treaty or in this act shall be deemed to repeal or affect any of the provisions of the immigration act トアルモ該規定ハ當時ノ移民法

ノミニ關スルモノナルカ或ハ其後ノモノヲ包含スルヤ一ノ問題ナルヲ以テ日本政府ノ意見ヲ問合ス必要アリ若シ當政

九 「カナダ」ニ於ケル本邦移民排斥関係一件 一八七

一一六

時危急ノ場合大ナル援護ヲ吾ニ与ヘタル國ノ政府ニ虚偽ノ言懸リ乃至悪意ノ誣告ヲ為スニ依リ決シテ問題ヲ解決シ得可キモノト信ゼズ又該問題処理ニ対スル他国政府ノ尽力及困難ヲ認ムルハ結局吾人ノ利益ナルガ該問題ノ処理ハ日本政府自体ニ取りテモ決シテ容易ノ事業ニ非ズ換言セバ同政府ハ我政府同様諸案件ヲ有スルガ故ニ其ノ最モ有効ノ解決ハ両国政府同心協力ニ依リテノミ得ラル可キモノニシテ予ハ日本政府ガ之ヲ為スニ客ナラザルヲ信ズルモノナリト云ヒ日本政府ノ誠実ナル態度ニ閑スル「ボーデン」内閣移民大臣「コールダー」氏ノ説(拙電第十八号参照)ヲ引照シ之レ千九百九年度迄ト異ナルモ其ノ後ニ於テモ日本政府ノ注意深キ遵守方法ニ変化アルラ認ムベキ理由ヲ知ラズ論述シ決議案中ノ exclusion ナル語ノ使用ハ討論ニ於テモ決議案ニ於テモ最モ其ノ使用ニ注意セザル可カラザル言語ニシテ特ニ東洋人ヲ憤怒セシメ易キガ為英帝国會議又ハ各国会議等ニ於テモ最モ其ノ使用ニ注意セザル可カラザル言語ニシテセルモノナキコトヲ指摘シ提案者ガ又ラ effective restriction ト変更スルニ於テハ賛成ス可シト述べ更ニ反対党首領「ミエイモン」氏ニ対シ曩ニ同氏ガ首相タリシ際國際

達スルニ迂闊ナルヲ述べ且B・C州議会ガ昨年通過セシメタル決議ニスラ如斯語句ナカリシニ中央議会ガ何ノ必要アリテ原案ノ如キ過激ノ文字ヲ採用スル理由アリヤ甚ダ了解ニ苦シムト言ヒテ修正ヲ主張シ進歩党首領 Crerar 氏(註)ハ日加ノ関係及國際ノ大勢ヲ説キテ之ニ賛成シ又拙電第一〇号ノ Woodsworth ハ東洋移民ヲ加奈陀ニ輸入セルハ加奈陀移民会社及鉄道会社ノ責任ニシテ移民自身ノ責任ニ非ズ而シテ此ノ種移民ガ諸種ノ事業ニ勢力ヲ得ルニ至レルハ白人ハ彼等ノ満足スル賃銀ニ甘ゼズ事業主ハ自然彼等ニ依リ労働ノ不足ヲ補充スルコトナレル為ニシテ移民排斥ハ先づ以テ国内労働賃銀ノ最低額ヲ決定シタル上ナラザル可カラザルトシテ排斥論旨ノ本末顛倒ヲ攻撃シ「キング」首相ハ原案ノ如キ決議ガ日本ニ電報セラレンカ必ズ恐ルベキ危險ヲ生ズルコトヲ注意シ B・C 州議員 Stevens ハ飽迄抗争スルヤ仮ニ地位ヲ代ヘ加奈陀ニ対スル同様ノ決議ガ日本議会ヲ通過セリトセバ吾人ハ如何ナル感ヲ生ズ可キカ本日当議会ガ原案ノ決議ヲ通過セシムレバ明日日本ニ於テハ右ニ等シキ悪感ヲ起ス可ク英帝国全部ニ閑シ由々敷問題ヲ惹起サシムルモノナリ吾人ハ反対党議員ガ B・C 州選舉民ニ誇

ルガ予ハ今ヤ之ヲ其ノ當人ニ要求スルモノナリト述べ下院ハ協約ノ相手国ニ誤解ヲ与フル如キ決議ヲ避クル必要アル處該國際重大問題処理方法トシテ立法ニ依ル時ハ殆ド効果ヲ望ム可カラザル上相手国トノ間ニ不和誤解ヲ生ズルコト必然ナルヲ以テ結局執ルベキ方法ハ友好平和ノ精神ヲ以テ商議ヲ開始スルニアリトシ世界平和ノ大勢ニ鑑ミ加奈陀ガ之ニ逆行スルコトノ不可ナルコトヲ説キ反対党ガ政府ヲ難局ニ入ラシメザランコトヲ希望スト結ビ Meighen 氏ハ之ニ対シ B・C 州ノ実状ヲ目擊セル者ハ必ズ排斥ノ必要ヲ感ズルコト及日子女ノ不同化ヲ説キ exclusion ナル語ヲ使用スルモ決シテ人種ノ優劣ヲ意味セズ吾人ガ日本ニ対シテ有スル敬意ニハ変化ナク唯吾人ハ日本ニ於テ吾人ガ享有シ得ザル権利有ル代リニ彼等ニモ之ヲ与ヘザルニ過ギザルヲ以テ日本ヲ怒ラシムル虞ナシトシ原案ヲ擁護スルト同時ニ若シ effective restriction トセバ何等政府ニ現行法変更ノ権限ヲ与ヘズ結局現状持続ニ終ル可シト反駁シ内務大臣 Stewart 氏ハ他国トノ商議ニ先立チ議会ガ排斥決議ヲ可決シテ談判ヲ開始スルガ如キハ不穩當ニシテ又目的ヲ在英大使在晚領事ニ転電セリ

示スル必要ノタメ英帝国ノミナラズ他国ニ閑スル國際難問ヲ惹起スル能ハザルナリト叱咤シ Meighen 氏ヨリ prohibition ナル文字ニ修正セント提議セルモ動カズ更ニ同氏ヨリ決議末尾ノ文句ヲ移民法ノ其レニ倣ヒ with a view to bringing an end to further such immigration for residence purposes ト修正セント提議シテ討論終決採決ノ結果前電ノ如クナレリ

在英大使在晚領事ニ転電セリ

註 太田總領事發内田外務大臣宛第一〇号(四月二十五日接受)

「新聞ハ貴下ヲ以テ東洋移民ニ好意ヲ有スト報ズルモ B・C 州ハ東洋人排斥ヲ欲ス貴下ノ選舉区ニ於テハ東洋移民ヲ選出労働党議員 J.S. Woodsworth ニ左ノ決議文ヲ送ヘル

コトヲ報告セルモノナリ

「新聞ハ貴下ヲ以テ東洋移民ニ好意ヲ有スト報ズルモ B・C 州ハ東洋人排斥ヲ欲ス貴下ノ選舉区ニ於テハ東洋移民ヲ必要トスルヤモ知レザルガ之ヲ B・C 州ニ強ユベキニハ非ザルナリ B・C 州ハ白人ノ加奈陀ヲ主張セントス貴下亦吾人ヲ援助セラレンコトヲ望ム」

サシムルモノナリ吾人ハ反対党議員ガ B・C 州選舉民ニ誇
九 「カナダ」ニ於ケル本邦移民排斥関係一件 一八八

一八八 五月十一日 在ヴァンクーバー 斎藤領事ヨリ
内田外務大臣宛

一一七

九 「カナダ」ニ於ケル本邦移民排斥関係一件 一八九

二一八

力ナダ議会ノ東洋移民排斥決議案可決ニ関ス
ル新聞報道振及論調報告ノ件

公第一三五号 大正十一年五月十一日

在晚香坡

領事 斎藤 和（印）

外務大臣伯爵 内田 康哉殿

領議会東洋移民決議案通過ニ対スル新聞論調

切抜送附ノ件

本月九日加奈陀領議会東洋移民決議案通過ノ報伝ハルヤ当地及「ヴヰクトリア」ノ各新聞ハ孰レモ數段ニ亘ル紙面ヲ

割キテ本案提出代議士「マクオーリ」外當州選出代議士ノ議場ニ於ケル討論ヲ詳報シタルニ反シ「オタワ」總領事發

閣下宛電第二九号ニ見ユル「キング」首相ノ詳細ヲ尽セル論述ニ就テハ之ヲ報ズルニ甚ダ吝ニシテ僅ニ数言ヲ費シタルノミニ有之候又本案通過ニ対シ當地「プロヴィンス」及「ウォールド」二紙ハ翌日ノ社説欄ニ於テ各論評ヲ試ミ

前者ハ該案ノ通過ハ現行移民制限法ノ有効ナラザルコトヲ語ルモノナリB・C州ニ於テハ東洋人ニ対シ何等區別的待

遇ヲ為シ居ラズ東洋人ニ対シ人種的偏見又ハ怨恨ヲ有セズ要スルニ此制限ハ經濟上社会上及政治上ノ理由ニ基クモノナリト論ジ後者ハB・C州ノ閔スル限りハ制限ノ励行ヲ目的トル政府訂正案ヨリモ「エクスクルージョン」ヲ目的

トセル原案採用ノ遙ニ優レルニ若カズト為シ東洋人ハ法律ヲ潜ルニ妙ヲ得タルヲ以テ制限ヲ規定スルコトノ無効ナルハ既往ノ経験ニテ明カナリB・C州ハ今ヤ白人ノモノニ非ズ黃色人及褐色人ノモノナリ等過激ノ言辞ヲ弄シ居リ候而シテ外他ノ新聞紙ハ何等本問題ニ就テ論ジタルモノ無之候而右社説切抜各一葉御参考迄及送付候 敬具

写送附先 オタワ總領事

註 社説切抜省略

一八九 五月十三日 内田外務大臣ヨリ 在オタワ太田總領事宛（電報）

日本ニ於ケル力ナダ人ノ権利享ニ関スル首相回答中ノ土地所有権、労働等ニ付テノ誤謬及不備訂正方訓令ノ件

第九号

貴電第二六号中(1)ニ關シ加奈陀人ハ本邦ニ於テ旧外国人居

留地以外ニ於テモ地上権永小作権ノ外賃貸借権アリ殊ニ法

人ヲ組織スルコトニ依リ容易ニ所有権ヲ獲得スルコトヲ得ヘク又地上権ノ存続期間ハ契約ニ依リ如何ナル長期ト雖モ約定スルコトヲ得ヘキカ故ニ實質上所持權アルト大差ナキヲ以テ在本邦外国人ハ實際上格別ノ不便ヲ感シ居ラサルカ如シ尚永小作権ノ存続期間ハ二十年以上五十年以下土地賃貸借権ハ二十年以下ニシテ永小作権及賃貸借権ハ更新スルコトヲ得又ハ明治三十二年勅令第三五一号ヲ指スモノナラムト思考セラルモ右勅令ハ條約又ハ慣行ニ依リ内地雜居ノ自由ヲ有セサル外国人即主トシテ支那人労働者ニ関スルモノニシテ加奈陀人ハ労働者タルト否トニ拘ラス任意ニ付右ノ点ニ付首相ノ書面ニ誤謬乃至不備ノ点アラハ首相ニ御懇談ノ上訂正発表セシムル様可然御配慮アリタシ

一九〇 五月十三日 在オタワ太田總領事ヨリ
内田外務大臣宛（電報）

東洋移民ニ關スル力ナダ議会決議ニ付注意ヲ
要スル点及キング首相ヨリ何等力申出アルベ

キ模様ナル旨報告ノ件 九 「カナダ」ニ於ケル本邦移民排斥関係一件 一九〇

二一九

九 「カナダ」ニ於ケル本邦移民排斥関係一件 一九〇

人ノ排斥ヲ最猛烈ニ主張シ概シテ白人ガ其競争ニ堪ヘザルコトヲ惧レ居ルコト

五、日本ノ支那労働者入國禁止法規土地所有權其ノ他各種ノ権利ヲ外国人ニ許サザルハ常ニ排日家ノ利用スル所ト為リ居ルコト

六、政府側モ何等カ現状ヲ改ムル必要アルヲ認メ居ル傾アルコト

ニシテ此際熟々考フルニ先般來在当地支那総領事ハ政府當局ト會見移民問題ヲ商議シ居ル趣ニテ本官ニ内話スル所ニ依レバ加奈陀政府當局ハ拙電第二十九号ノ首相論弁中ニアル如ク同政府ニ於テ監督シ得ル方法ニ依リ旅券ヲ發布之ニ依リ支那人渡航ヲ取締ラントスルニアルモ日本移民ニ対スル日本政府ノ取締振リニ關シテハ現状ニ満足シ居ルモノト見受ケ居タル由又「キング」首相モ曩ニ本官ニ向ヒ類似ノ意向ヲ洩シタルコトアリ從ツテ今回ノ決議案ニ關シテモ政府ハ支那移民ノ取締ヲ主眼トシテ日本移民ニ對シテハ左程必要ヲ感ジ居ラザル如クナルモB・C州議員ノ議論ハ寧ロ日本移民排斥ヲ主タル目的ト立テ條約及「ルミュー」協約ノ破棄ヲ主張シ首相及内相モ其ノ論弁中幾分彼等ニ譲リタル傾

桑港在勤ノ経験ヨリ稍其ノ方面ノ事情ニモ通ジ居ルト信ズルモノナルガ墨西哥ヨリ加州ニ潜入スル移民ノ多少有ルハ事実ナルモ加州或ハ華盛頓州ニ在留スル移民ガ加奈陀ニ潜入スル例ハ知ラズ又如斯コト殆ド無シト思フ旨ヲ述ベタルニ首相ハ自分モ同様ノ考ヲ有スルガ兎ニ角議会閉会後ニハ時間ノ余裕モ出来ル筈ナルニ付移民問題其ノ他ニ付会談シ度シトノコトナリシニ依リ本官モ重ネテ承諾ノ旨ヲ述べ之レ以上深入リスルコトハ見合セタルモ当政府ニ於テ我レニ對シ何等申込ミヲ為サムトノ意アルコトハ略推察シ得ル所ニシテ該申込ミハ凡ソ(A)「ルミュー」協約ヲ今一層制限的ノモノトスルコト(B)日英条約加入ノ文書中所謂來住法ニ関スル日本政府ノ解釈ハ當時ノモノノミヲ指スヤ否ヤ(C)条約廢棄問題等ノ内ナラムカト思ハルニ付本省ニ於テモ予メ研究シ置カレ度シ

尚排日運動ハB・C州ニ於テ漁業木材業小商業農業ト言フガ如クニ各種ノ事業ニ對シテ蔓延スルノミナラズ領土的ニモ漸次拡張セラレ結局米國ニ於ケル排日ト同様東部ノ人心モ之ニ傾クニ至ル虞アルヲ以テ成ルベク速ニ適當ノ処置ヲ講ズル必要アリ本官ノ意見ニテハB・C州ニ於ケル帰化人例ヘバ「スチブンソン」漁者慈善團ノ如キモノヲ中心團体

二二〇

アリトモ観察セラルニ依リ日英条約ノ廢棄通告期間（本年七月）ニ達セバ當政府ハ其ノ方法ニ出ヅルヤモ計ラレズ又其ノ以前ニ於テモ「ルミュー」協約ニ付何等カ吾ニ対シ提議スル必要ヲ感ジ居ルニ非ザルカトモ思ハル節アリ

現ニ去ル十日「キング」氏ハ本官ノ晚餐ニ来リタル際右決議案ノ如キガ議場ニ現ハレタルヲ遺憾トスル旨ヲ語ラレタルニ依リ本官ハB・C州議員ハ概シテ加州ノ職業的排日家ノ議論ヲ祖述セルモノノ如キモ貴總理大臣ノ演説ニハ大ニ

感心セリ又我政府モ貴大臣ノ「コンシダレート、アティチュード」ハ充分「アフレシエート」スルコトト思フ旨ヲ語リタル處実ハB・C州議員ノ議論ト政府ノ態度トノ差異ヲ一般ニ知ラス必要モ有リタル次第ナルガ此ノ問題ニ關シテハ其ノ内貴官ト談合シ度キ希望ナリト謂ヒ本官ガ承諾ノ旨ヲ答フルト同時ニ元来加奈陀ニ於ケル日本人數ハ普通一万六千ト謂フモ帰化人ガ大多数ヲ占メ居ル事情ナルガ故ニB・C州ガ爾餘少数ノ日本人ニ向ツテ兎ヤ角云フハ甚ダ諒解ニ苦シム所ナル旨ヲ附言セル處同總理ハ帰化人ノ比較的多キハ自分モ承知セシモB・C州議員等ハ此ノ外米國ヨリノ密入国者多キヲ訴ヘ居ル次第ナリト語ラレタルニ依リ本官ハ

トシテ加奈陀市民タル立場ヨリ運動セシムル傍日本人会ノ如キモ適當ノ範囲ニ於テ活動セシメ其方法ハ不取敢小冊子ノ配付同化運動等ニ依ルヲ可ナリト考フルモ之ガ為ニハ相当資金ヲ要スルハ勿論指揮者及運動者ノ性質技能ニ俟ツ所大ナルニ依リ本省ニ於テ地方特別ノ事情斟酌セラレタル上何分ノ御措置アランコトヲ希望ス

英、晚香坡ヘ郵送セリ

一九一 五月十五日 在オタワ太田総領事ヨリ
内田外務大臣宛（電報）

東洋人移民問題ニ關スルカナダ政府ト日支間

往復文書公表方要請ノ動議下院ニ提出サレタ

ル件

第三一号

（五月十七日接受）

五月十五日晚香坡選出議員「ステイブン」ハ移民制限ニ關シ本年一月一日以来加奈陀政府ト日支兩國政府若クハ其代表者トノ間ニ往復セル文書ノ公表ヲ求ムル動議ヲ下院ニ提出シ首相「キング」氏ハ之ニ對シ支那人移民問題ニ關シテハ八日ノ議場ニ述ベタル如ク（往電第二十九号）右ハ支那總領事トノ私的會見ニシテ何等文書ノ往復セルモノ無ク日本

九 「カナダ」ニ於ケル本邦移民排斥関係一件 一九二 一九三 一九四

政府若クハ其總領事トノ間ニ於テモ同様ナリト答へ動議ハ

撤回セラレタルガ首相ハ該答弁中政府ニ於テハ本件ノ如キ

問題ノ解決ハ個人的談合ニ依リ最モ有効ニ達セラルベシト

ノ意見ヲ有スル処当地駐在ノ日支両国代表者ハ孰レモ商議

ヲナスニ適當ナル者ト思考スルニ付政府ハ之等ト会商セン

ト考ヘ居ル旨附言セリ

英、晚香坡ヘ転電セリ

一九二 五月十九日 内田外務大臣ヨリ
在ヴァンクーヴァー斎藤領事宛(電報)

B・C州ニ於ケル排日対抗運動開始問題ニ付

意見提示方訓令ノ件

第五号 オタワ總領事発本大臣宛電信第三〇号ニ関シ此際排日対抗運動ヲ開始スルコトノ可否及若シ之ヲ開始スルトセハ其ノ方法ニ要スル費用並適當ノ指導者ヲ得ル見込ノ有無等貴地ノ事情ニ照ラン貴見大要電報詳細郵報アリタシ

右オタワ總領事ヘ郵送アリタシ

一九三 五月二十一日 在オタワ太田總領事ヨリ
内田外務大臣宛(電報)

B・C州ニ於ケル排日対抗運動ニ關シ意見回

電ノ件

一九三 五月二十一日 在オタワ太田總領事ヨリ
内田外務大臣宛(電報)

B・C州ニ於ケル排日対抗運動開始問題ニ付

意見提示方訓令ノ件

一九三 五月二十一日 在オタワ太田總領事ヨリ
内田外務大臣宛(電報)

B・C州ニ於ケル排日対抗運動ニ關シ意見回

電ノ件

別紙第一号ノ通該訓令ノ趣旨ヲ認メタル書面ヲ持參シ訂正

二二二

日本ニ於ケル力ナダ人ノ権利享有ニ關スルキ
シグ首相ノトルミーニ對スル回答中ノ誤謬訂
正方首相ニ申入レタル件

(五月二十三日接受)

貴電第九号ニ關シ

該訓令ノ趣ラ書面ニ認メ二十一日「キング」首相ニ面会ノ上訂正方申入レタル處右ハ英國政府ヨリ得タル報道ニシテ

(往電第二五号)当政府ニ於テ取調ヘタルモノニ非サルモ

御申越ノ次第モ有ルニ付何トカ訂正ノ途ヲ講シタク成ルヘ

ク金曜日(二十六日)ニ議場ニ諮リ度キ考ナリト云ヒ快ク

承諾セリ尚本月五日ノ回答中ニ見エタル帰國日本人數ハ當

館ニ於テ取調ヘタルモノト相違アルニ付其訂正方モ申入レ

置キタリ委細郵報ス

一九四 五月二十八日 在ヴァンクーヴァー斎藤領事ヨリ
内田外務大臣宛(電報)

B・C州ニ於ケル排日対抗運動ニ關シ意見回

電ノ件

九 「カナダ」ニ於ケル本邦移民排斥関係一件 一九四

一一一四

方ヲ懇談シ且同時ニ右答弁中ノ第四点ニ於テ日本人ノ加奈陀出入数ヲ示シ居レル内日本人帰国数ハ日本政府ノ毎月刊行スル報告ニ依レル旨ヲ附言シアルニ不拘其数ハ當館調査ノヤノヨリ少數ナル事ヲ発見セルニ付此レカ訂正方ヲモ別紙第二号ノ通申込ニ且ツ其参考トシテ當館ニ於テ各年度ニ亘リ月別ニ調査セル統計及御訓令ニ関スル部分ノ参考トシテ一、日本民法債権篇中賃貸借総則ニ関スル部分及物権篇中地上権並永小作権ニ關スル部分ノ翻訳ヲ添付シ
二、更ニ桑港在米日本人会ニ於テ編纂セル「日本ニ於ケル外国人ノ土地所有並借地権」ニ関スル論文一部ヲモ添付シ一括首相ニ手交致シ候處首相ハ抽電第三二二号ノ通訂正方取計フ可キ旨ヲ約シ多分二十六日（金曜日）ノ議場ニ於テ訂正スル事トナル可キ旨申添ヘラントモ當日ノ議場ハ予算討議ニ忙殺セラレタル為カ遂ニ其事無ク越エテ一十九日朝ニ至リ首相ヨリ電話ニテ右延引ノ理由並ニ同日ノ議場ニ於テ右訂正報告ヲ為ス可キ旨ノ通知有之同日午後別添第七号議事録ニ相見エ候通ノ訂正有之又當地新聞ニモ右ノ趣掲載セラシ居リ候
尚右拙電中ニヤ一回致候通日本ノ法制ニ關スル部分ハ英國

本信写送付先 在晚領事
左記

TER FOR FOREIGN AFFAIRS, TOKIO.

May 15th, 1922.

You are hereby instructed to call upon the Prime Minister of Canada and to confer with him with a view to having his answer to the questions

1. Free translation of Instructions received by the Japanese Consul-General.
2. Note Verbale.
3. The Civil Code of Japan. (1編区説)
4. Foreign Land Ownership and Leasing in Japan.
5. Japanese Passengers Returned from Canada.
6. House of Commons Debates, No.37.
7. House of Commons Debates, No.51.
拙右書類中々内訳ヘア省略シ

(別紙第一項)

十五日臨内田外務大臣ヨリ太田総領事宛諭令英訳文

FREE TRANSLATION OF INSTRUCTIONS

RECEIVED BY THE JAPANESE CONSUL-GENERAL, OTTAWA, FROM THE MINIS-

九 「カナダ」ニ於ケル本邦移民排斥関係一件 一九四

政府ヨリ得タルモノナル趣ニシテ右ハ在東京英國大使館ノ調査ニ係ルモノト察セラルニ付適當ノ方法ニ依リ該大使館ノ誤報訂正方本省ニ於テ可然御取計相成度候

將又一十九日首相ヨリ電話ノ際前記日本人帰国数統計ハ當領國務省カ在東京英國大使館ヨリ得タルモノニテ同省ニテハ一應同大使館ニ確メタル上ニ非サレハ訂正ノ途ヲ講シ得サル旨申シ居ルニ付右第一段ノ訂正ト同時ニハ取計ヒ兼ヌル趣申添アリタルヲ以テ本官ハ加奈陀政府ニテ研究済ノ上ニテ差支ナキ旨答ヘ置キタルニ依リ別添議事録ニハ該訂正ヲ見サル次第ナルカ本月五日ノ議事録所載答弁中ニハ明ニ此部分ノ数字ハ日本政府ノ月報ヨリ取りタル旨アリ又當館ニ於テモ毎月之ヲ當國政府ニ送付シ居ル事實ニ鑑ミ右國務省ノ申立ナルモノハ甚タ疑ハシク或ハ一時責任回避ノ為ナランカトモ推察セラル節有之候得共反対党ニ対スル政府ノ立場モ可有之ニ付余り性急ニ迫ルモ如何カト被存候条差当リ右ノ儘トシテ其経過ヲ看視スル事可然カト考ヘ居リ候尤モ本省ニ於テ何等右ニ関シ御考案モ有之候ハハ電報ニテ御回訓相成度左記添付書類相添ヘ右報告旁々此段及稟申候

敬具

The Japanese Imperial Ordinance No.352 dated the 28th July, 1899, provides that all aliens,

一一一四

regardless of the fact that some of them are not entitled by treaty or customary practice to freedom of residence in Japan, may reside, move or pursue their callings in any place outside the former foreign settlements or the 'mixed residence' areas.

The Japanese Government, mainly in order to ameliorate the restrictions that had been put upon Chinese labourers, promulgated the above Ordinance with a proviso that alien labourers coming from countries having no commercial treaty with Japan or not entitled by customary practice to do so, may not pursue their callings outside the limits of the former foreign settlements or the 'mixed residence' areas without the permission of the administrative authorities. It is needless to say, therefore, that Canadian citizens, irrespective of their calling—labourer or non-labourer, stand outside the scope of this Ordinance and are fully

ing and holding of land, nor do they complain of the restrictions which still exist with respect to land ownership by an individual alien and which the Japanese Government hopes soon to remove.

(在國輔士)

日本國太田總領事ニニ日本國地主權
日本人地主權問題出方ハ其

Note Verbale.

The attention of the Japanese Consulate-General has been drawn to the figures which were given in answer to Hon. Dr. Tolmie's question No. 4 printed in Hansard of May 5th, showing the number of Japanese passengers returning from Canada to their own country. It is said in the answer that those figures were taken from the returns issued monthly by the Japanese Government.

The Consulate-General desires to state that there are some differences between the figures recorded in Hansard and those which have been compiled at the Consulate from the monthly returns of the Japanese Government. The Consulate-General, therefore, begs to attach herewith the statistics compiled by them in the hope that the necessary steps will be taken by the authorities concerned to investigate the matter.

For the further information of the Canadian authorities the Consulate-General begs to attach herewith a copy of a pamphlet containing an article on 'Foreign Land Ownership and Leasing in Japan' by John Gadsby, also translations of certain articles from Japanese law regarding land holding.

May 20th, 1922.

九 「カナダ」ニ於ケル本邦移民排斥関係一件 一九六

歸化拒否サンタル日本人ニ付眞報及係判事二

日本国籍法ニ付説明セル書簡送付ノ件

附屬書一 五月二十一日附シ ハボサム弁護士ニ付

本人会宛書簡写

二 五月三十一日附斎藤領事ヨリグラント判事

宛書簡写

三 日本国籍法ノ説明

(六月一十六日接受)

大正十一年六月五日

在晩香坡

領事 斎藤 和 (印)

外務大臣伯爵 内田 康哉殿

帰化権被拒否邦人実状調査及グラント判事意見

是正方ニ閲スル件

客月五日貴電第四号御申越ノ趣敬承先ツ邦人帰化申請被拒

絶者氏名ヲ知ルノ要有之当地日本人会ニ右取調方依嘱致候

処更ニ同会ニ於テハ邦人カ該申請ヲ為スニ方リ手続上平素

最セ多ク依頼致候趣ナル弁護士 Shoebotham ニ軒嘱調

査セシメタル趣ニ有之同人ヨリノ回答 (別添写第甲号) 二

一一一八

依レバ被拒絶者ハ浅岡藤一郎外八名ニシテ帰化拒絶ノ理由
ハ帰化申請書ノ裏面ニ記入セラレ右申請書ハオタワ政府内

務大臣ニ進達ズミナル由ニテ当地裁判所ニハ別ニ其記録現

存セバ明カナラナル趣ナルモ当館登録簿ニ依リテ見ルトキ

ハ一名ノ不明者ヲ除キ他ハ凡テ二十二才乃至三十才以内ノ

青年ニシテ右ノ内日下當市在住ノ者ニ就テ聞キタル所ニ

レバ多分何レモ徵兵延期者ナラント認メラル趣ニ有之候

兎モ角本月五日ニ同判事ノ手ニ依リ他ノ申請者ニ対スル審

問開廷セラル皆ナルヲ以テ別紙乙号写ノ通一書ヲ認メ

「グラント」判事ヘ送付致置候ニ付右様御了承相成度尚又

審問ノ結果及同判事ヨリ右拙信ニ対スル何等カノ回答モ有

之候ハバ追テ御報可申進

右不敢申進候 敬具

写送付先 在オタワ總領事

(附屬書一)

一九二一年五月二十一日附シ ハボサム弁護士ニ付本人会

宛書簡写

McDiarmid, Shoebotham & McDiarmid.

scribed under the naturalization Act and are immediately after the sittings of the Court forwarded to the Secretary of State at Ottawa.

I am also providing you with a list of the applications for naturalization on behalf of Japanese, to come up on the fifth of June next.

There is every reason to believe that these applications will meet the same fate that the others who have already appeared before Judge Grant have met during 1922. As a matter of fact, no Japanese application has been approved during 1922.

He also made a search of those who have already appeared before Judge Grant, who is handling naturalizations for the year 1922, and I am enclosing a list of those who appeared before him, all of whom were disapproved.

Unfortunately there is no specific memorandum of the reasons for his not approving these applications as they are endorsed upon forms pre-

You will also notice that in the list of those that have already been disallowed there are the names of Japanese who evidently have made their application during the latter part of 1921. We would suggest to you that some person should attend the sittings of the Court on the 5th of June and be in a position to make a report of exactly

一一一九

六 「日本國」に於ける本邦公認審査課送付書 一九二二

what occurs when these different applications come before Judge Grant.

Personally, we are of the opinion that when an applicant for naturalization fulfills the requirements of the law, and is endorsed by the opinions of reputable natural born British subjects, as required by the Act, it is the duty of the officer hearing the application to approve the same, and that citizenship should be granted in the ordinary way.

We would be glad to hear from you on receipt of this letter with the enclosed report.

Yours truly,

McDiarmid, Shoebottom & McDiarmid,

T. B. Shoebottom.

LIST OF JAPANESE APPLICANTS FOR
NATURALIZATION FROM 1ST JANUARY
1922 TO DATE

Shinzaburo Kawaguchi

22才

(藍國輔)

(同上)

Takeo Namba

27才

(藍國輔)

(同上)

Kanenosuke Onori

25才

(藍國輔)

(同上)

Takujiro Takenaka

25才

(藍國輔)

(同上)

Keisuke Takaki

不明

(藍國輔)

(同上)

No Reasons on record for the non-approval of the above.

List of Applicants Awaiting HEARING

for 5th of June, 1922.

Tomojirō Toyama

Taro Kamashiro

Harry Miyasaki

Tommy Nishisawa

Tasajirō Nakaya

Seigu Sakugawa

Ichi Ueyama

Tokizo Kitamura

Yokichi Sasaki

Tiruo Tanihara

六 「日本國」に於ける本邦公認審査課送付書 一九二二

一一〇

Taro Kanashimo
Tokizo Kitamura
Sadanabu Maribashi

Harry Miyasaki
Tasajirō Nakaya
Tommy Nishisawa

Seigu Sakugawa
Yokichi Sasaki

Tomojiro Toyama
Teruo Tanihara
Ichi Ueyama
Bunjiro Uyeda

No Japanese has been approved this year.

LIST OF APPLICANTS APPEARING
BEFORE JUDGE GRANT (not approved)

Toichiro Asaoka

25才

Yoriki Iwasaki

30才

Genichi William Kinoshita

24才

Kishizo Kimura

23才

May 31st, 1922.

His Honor Judge Grant,

Court House,

Vancouver, B. C.

Dear Sir : —

Sometime ago I noticed in a local newspaper an account of an interview with its reporter with regard to the attitude you take in connection with the naturalization in Canada of Japanese subjects.

In the said interview you make some reference to our law, on which it seems you base, at least partially, the wholesale refusal to grant naturalization papers to Japanese applicants, regardless of their respective individual status under our legisla-

一一一

tion.

I do not know whether or not the interview accredited to you truly represents your view. If it does, with all due respect, I am afraid that you have not been fully informed of our law in this regard.

I venture, therefore, to take the liberty of appending a memorandum with a view of making clear to you the status of naturalized Japanese in their mother country.

In the meantime, I trust that you will not construe this action as prompted by any anxiety on my part to have our subjects naturalized to this country, but I believe it will help you understand clearly in what standing naturalized Japanese are placed under our legislation, which would appear to be much misunderstood generally among the citizens of this country.

With best regards, I am, dear sir,

11111
Your obedient servant,

Consul for Japan.

(蓋眞印)
大日本國外國人對外關係法典 152

JAPANESE IN THEIR ORIGINAL COUNTRY

The Japanese law of Nationality provides in Art. 20 that one who has acquired foreign nationality out of his own volition loses his Japanese nationality. At the same time there is a derogatory clause in another part of the same law which runs as follows:—

Article 24. Male persons exceeding 17 years of age do not lose their Japanese nationality despite the previous provisions, unless either they have already fulfilled active service in the Army or Navy, or they are under no obligation to serve in it.

The first proviso above referred to, hardly needs any explanation, the meaning being self-evident.

As to the second, it is desirable to know the circumstances under which the obligation of a Japanese subject to enlist for service in the Army or Navy may be at an end. The following may be quoted as the principal instances of exemption.

1. When the physical or mental conditions of the subject do not come up to the prescribed standard;

2. When the subject has been convicted of a criminal offence, and sentenced to more than six years imprisonment with or without hard labor;

3. When the subject is exempted owing to the excess of adults over the requisite number for annual conscripts;

4. When the subject is continuously resident abroad (excepting brief visits to Japan) and attains

the age of 37 years.

From the foregoing, therefore, firstly you will see that if the Japanese subjects under the age of seventeen and over 37 years happen to take any other nationality by their own will they are expatriated automatically by the operation of law.

Secondly, it is also noted that there are, among those whose ages range between 17 and 37 years, men (and their name is legion) who are perfectly free from military service in Japan, and consequently lose their Japanese nationality when naturalized to another country.

It is also noticeable that in Japan there is no law forcing their subjects residing abroad to come back to Japan in order to join the colors. Quite on the contrary, our Conscription Law grants to such oversea Japanese (excepting those living in the countries in Eastern Asia) certain privileges, by virtue of which they are entitled to have post-

六 「カナダ」に於ケル本邦移民排斥法第1章 142
poned year after year their enrollment for service in the Army or Navy until they reach 37 years of age, if they apply for this with a certificate of residence abroad issued by the Consular officer of the locality, and when they attain in this manner to the age specified, no further obligation attaches to them for service in the Army or Navy.

The spirit of Article 24 cited above is really intended only to defeat the specious design certain Japanese subject may entertain of evading military or naval service in Japan by acquiring foreign nationality for such purposes only and for no other reason, but *bona fide* residents abroad are entirely immune from military services in Japan with the privilege of visiting Japan at their pleasure provided that their stay there does not extend over a considerable period of time. Their sole obligation is to apply yearly to the Japanese Government for postponement from enrollment.

一九七 六月八日 在カナダにて一斎藤領事
内田外務大臣宛
ケトハトニヨリノ依ル帰化法廷審問ノ模様報知
ノ件
附屬書 弁護士ハニモサム發日本本人会宛書信等
ケトハトニヨリノ判事ノ帰化法廷審問ノ闇ベル件
機密第一号
(六月二十六日接収)

大正十一年六月八日

在晚香坡

領事 斎藤 和(丑)

外務大臣伯爵 内田 康哉殿

帰化法廷審問ノ模様ニ關スル件

六月五日附機密第一〇号拙信中申進置候通り本月五日当地裁判所法廷ニ於テ「ケトハト」掛判事ノ手ニヨリ帰化申請ニ対ベル審問開始セラレ當口審問予定表中ニ「支那人」一名及遠山友次郎外一名ノ邦人包合ヤハ居候得共邦人二名ハ「ケトハト」判事既往ノ態度ニ顧ミ到底詰可ノ望ナシト思惟シタリシニヤ右二名ハ孰レモ欠席シタルタメ邦人ニ対ベル同判事ノ意見ヲ聞ク能ハサリシモ別添弁護士「ニモサムサ」ニ於ケル本邦移民排斥関係一件 一九七

The penalty for this omission without cause is a fine not exceeding fifty dollars and even this penalty is but nominal as it can not be enforced unless the person liable returns to Japan.

It will, therefore, be seen that even those persons who are deemed in Japan to be Japanese subjects within the meaning of the provisions of Art. 24 of the Law of Nationality are in no wise molested by the military authorities in Japan so long as they remain *bona fide* residents of the land of their adoption. The provisions contained in Article 24 constitute an impediment only to those Japanese who seek naturalization with no intention at heart to live in the new country but merely to escape military or naval service. It is unnecessary to add that even taking into consideration Article 24 of the Japanese Law of Nationality many Japanese who become naturalized in Canada immediately thereupon lose their Japanese nationality.

「」紹由本人会宛書信等廿二相見候通り判事へ頗ル強硬ニ支那人ノ帰化ニ反対シ國務省ニ帰化推薦ノ責任ヲ取ル能ベバト申シ渡シタル由ニ有之又同日夕刊「ヘロガマ」紙が更ニ其詳ヲ伝ヘル所ニ依レバ「ケトハト」判事ハ十一年間当州ニ在住シ帰化ヲ申請セル支那人ノ保護人ニ対ハ圓頭先ツ十万ノ支那人ヲ加フルロトヨリテB・C州ヲ利スくシト思惟ベルヤト詰リ後進ソテ曰ク予カ農業ニ就テ調査セル所ニヨハ支那人ハ輪作ヲ行ハス毎年同一ノ地ニ馬鈴薯ノミラ作り地力ヲ消耗シ之ヲ還元スルニハ七年ヲ要スト聞ケリ要スルニ問題ハ東洋人ヲ以テ吾人ノ邦土ヲ充々ベキヤ否ヤニ在リ彼岸ニハ五億ノ東洋人アリ十万人ヲ失スルモ何等闊スル所勿ルヘン予カ死スルヤ我等子孫ノ為ニ最適ノ居住地トシテ我国ヲ保留セント欲ス予ハ職責上今日ノ現状ニ比シ此邦土ヲヨリ以上良好ナラシメ石ヲサルモ敢テ現状ニ劣ラサル情態ニ邦土ヲ維持スシト思惟ベル能ハサル人民ヲ推奨ベルハ其敢テ能クスル所ニ非ベト宣シタル趣ニ有ハ候

尙前記「ニモサム」く口本人ガ如何ニ誠実ニ帰化ヲ得ヘバベルセ「ケトハト」判事ハ手ニヨリテ帰化ノ推薦ヲ得

九 「カナダ」於ケル本邦移民排斥関係一件 一九七

一一一七

ハニユハ殆ト望ナキヲ以テ寧口直接オタワ内務大臣ニ申請スル様勧奨致居候得共係判事カ推薦セサルニ不拘排日ノ氣鬱勃タル今日中央政府カ敢テ之ヲ省々ス認許ヲ与フルカ如キハ頗ル困難ノ事ト被察候而已ナラス現ニ本年一月「ハニ」ト判事カ推薦ノ辞ヲ附セバ「オタワ」ニ進達シタル邦人帰化申請ニ対シ三箇月余ノ今日猶未タ何等ノ裁定ヲ与ヘランナルニ鑑ニ此際此種ノ手段ニ訴フルハ必ベシヤ得策ニ非サルくシテ思料セラレ候ニ付係判事ハ交替（浦市郡裁判所ニハ「タマハム」外二名ノ判事アリ數ヶ月毎ニ交互ニ其分担ヲ取替ヘ職務ヲ執行シ居ル趣ナリ）ヲ待チ更ニ申請ヲ試ムル方可然眞日本人会幹事迄本官ノ意見ヲ申聞ケ置候右及報告候 敬具

写送専先 オタワ總領事

(附屬書)

弁護士八名半サム発印本人公文宛書信等

クハシム判事ノ帰化法廷審問ニ関ヘル件

(COPY)

McDIARMID, SHOEBOOTHAM & McDIARMID

June 5th, 1922.

九 「カナダ」於ケル本邦移民排斥関係一件 一九七

一一一七

The Secretary,
Canadian Japanese Association,
329 Gore Ave., Vancouver, B.C.

Dear Sir,—

RE NATURALIZATION.

We beg to advise to you that our Mr. Shoebottom attended the sittings of the County Court this morning when His Honour Judge Grant heard applications for naturalization. Of the list that was furnished to me of those who might appear before him this morning only two names appeared on the list, but neither one of the Japanese appeared for examination by Judge Grant in order to obtain his approval.

One of those names which were on the list was Tomojiro Toyama, and the other was named Nanba but was not on the list, he evidently having qualified so far as time was concerned, between the date of my making search of the record

and the sittings of the Court. However, we feel quite sure that had they appeared Judge Grant would not have approved their application because there were two Chinese who made application to Judge Grant and although they were strongly recommended by two naturalborn British subjects in each case the Judge spoke very strongly against them and intimated that he would not take responsibility of recommending the application of the petitioners for citizenship.

We feel that the only solution of the difficulty is to take this matter up directly with the Secretary of State at Ottawa and point out strongly that His Honour Judge Grant is not acting consistently according to the spirit of the Act. No matter how sincere a Japanese may be in his desire to obtain Canadian or British Citizenship, Judge Grant will not allow him to become a Citizen.

McDIARMID SHOEBOOTHAM & McDIARMID.

Per T. B. Shoebottom

Yours truly,

一九七 六月九日 在カナダハムカト一斉藤領事ニハ
B・C州新規事務マハツハ東洋人排斥體
處報知ハ生

公第一六一號 (大正十一年六月九日)

在晚香坡

領事 斎藤 稔 (五)

外務大臣伯爵 内田 康哉殿

前B・C州檢事綏略 John Wallace de Beque Farris, K.C. (東洋人排斥) 閣ハ強硬ナル意見ヲ有シ曩ニ州ノ領林地租借者ガ該林地ニ存ベル木材採伐上東洋人ヲ使用ヘル

九 「カナダ」ニ於ケル本邦移民排斥関係一件 一九九

二三八

権利ノ有無ニ関シ訴訟ヲ提起シ終ニ加奈陀大審院ノ裁定ヲ仰グニ至リ候次第ハ既ニ御熟知ノ通ニ有之候處党内「オリヴァー」内閣ノ施設ニ關シ不平ノ徒不尠昨秋ノ議会ニ於テハ僅々一、二名ノ多數ヲ制シ辛フジテ現内閣ヲ持続スルヲ得タル而已ナラズ客秋領議会代議士選挙ニ当リテモ党内ノ人心一致ヲ欠キ當市ニ在リテハ同党内候補者全敗ノ憂目ヲ見ルニ至リタルヲ以テ民主党參謀總長ノ格ニ在リタル「アリス」ハ本春挂冠野ニ下リ州下院議長 Alex M. Manson

其後ヲ襲ヒ検事総長ノ職ニ升リ候處同氏ハ本月七日「ヴィクトリア」市「エムプレス、ホテル」ニ開催セル西部都市聯合会席上ニ於テ一場ノ演説ヲ試ミ東洋人問題ニ關シテハ左ノ如ク甚タ低劣ナル排斥論ヲ提倡致居候即チ

東洋人ノ脅威ハ最惡ノ問題ニシテ平原諸州ガ加奈陀領域ノ一部トシテ其義務ヲ自覺セザランカ吾人ハ實ニ重大ナル形勢ヲ招致スルニ至ルベシ今日東洋人ハ當州ノ勞働界及商業界ヲ混亂セシムル一因子ナリ彼等ハ十年前ニハ本通りニ更ニ一個ノ商店ヲモ有セザリング今ヤ一見東洋人ノ店舗タルコトヲ識別シ能ハザルガ如キ店名ノ下ニ隠レテ本通リニ店舗ヲ構ヒツツアリ平原州人ニシテ本問題解決ノ為ニ吾人ヲ

援助スベキヤ否ヤ若シ吾人ノ社會ヨリ永久ニ東洋人勞働者ヲ排除スルコトヲ得ンカ失業問題ハ大ニ痛切ノ度ヲ減ズベシ云々ト説キ從来二三ノ集会ニ於ケル演説及別添都市代表者トノ會見談等ニ見排並問題ニ對スル同氏ノ態度ハ頗ル鮮明ニシテ英本国ノ國際的地歩ヲ鞏固ナラシムル為吾人ハ地方的利益ヲ犠牲トスベカラズト表白致居候

右及報告候 敬具

写送付先 オタワ 総領事

註 添附ノ新聞切抜省略

一九九 六月十七日 在ヴァンクーバー 斎藤領事ヨリ
内田外務大臣宛
B・C州ニ於ケル排日対抗運動ニ付詳報ノ件

機密第一三号 大正十一年六月十七日

在晩香坡

領事 斎藤 和(印)

外務大臣伯爵 内田 康哉殿
排日対応運動ニ關スル件

(七月十日接受)

該運動開始ノ可否若シ之ヲ開始ストセバ其方法之ニ要スル費用竝ニ適當ノ指導者ヲ得ル見込ノ有無等当地ノ情況ニ照ラシ與見陳述方曩ニ御電訓ノ趣敬承當時大要及電答置候得共更ニ其詳ヲ記センニ

(一) 排日ノ原因ハ屢報ノ如ク素ヨリ多岐敢テ米国ニ於ケルト異ルナク米国ニ於ケル諸原因ハ凡テ移シテ以テ之ヲ當州ニ適用スルコトヲ得ベシ然レドモ當州ニ於ケル排日熱ガ米国ニ於ケルモノニ優リ一層悪性ニシテ從ツテ之レガ対症療法モ一層困難ナラズトセズ依テ如何ナル点ニ於テ兩者相異ル所アルヤラ見ンニ

(二)

米国ニ於ケル排日熱ハ一二日本人ヲ対象トスト雖モ當州ニハ少クモ日本人ニ四倍乃至五倍スル支那人在住スル而已ナラズ是等支那人ハ日本人ヨリモ一層自省ノ念薄ク常ニ排斥ノ種子ヲ播蔵シツツアリ此多數支那人ニ対スル排斥ノ餘沫が偶々本邦人ニ影響シ所謂巻添ノ難ヲ蒙ルコト鮮少ナラズルコト

(三)

九 「カナダ」ニ於ケル本邦移民排斥関係一件 一九九

二三九

米国出生ノ日本人ハ米国市民トシテ完全ニ私權及公權ヲ有スト雖モ日本人系加奈陀市民ハ出生ト帰化ニ依ルトヲ問ハズ當州ニ於テハ選挙權ヲ有セズ故ニ米国ニ在リテハ米国出生児ノ丁年ニ達シ公民トシテノ權利ヲ行使シ得ルノ曉ニハ或ハ本日ノ排日熱ハ其影ヲ潜ムルニ至ルベシト雖モ日本系加奈陀人カ如何ニ其數ヲ加フルモ本問題解決上何等資スル所ナキコト

(四)

米国ニハ國內既ニ約千万人ニ近キ黒人種存在シ偶々「白人國」ヲ呼号スル者アルモ毫モ之ヲ如何トモスル能ハズ從テ其声必ズシモ大ヲ為サズ然レドモ英屬領地ノ自治植民地ニ於テハ既ニ「白人國」ノ目的ヲ達成シ全然有色人種ヲ一掃シ否ラザルモ諸種ノ權利ヲ拒絕シ幾んど奴隸的境遇ニ陥レ特種階級ノ民族トシテ之ヲ取扱ヒ居レリ故ニ當州々民ガ是等姉妹自治領土ノ現状ヲ目撃シ之レト衡平ヲ保チ「白人國」化セントスルノ慾望遙ニ隣国ニ優レリ而シテ此慾望ハ戰後自治領植民地ガ對英關係ニ於テ「各自獨立セル國家ノ聯合」ナル觀念ヲ強メ來リ英本国ノ為地方的利益ヲ犠牲ニスルヲ厭フノ情ト共ニ益々濃厚ヲ加フルニ至レルコト

二三九

(五)

米国ニハ清教徒ノ移植以来正義ノ観念頗ル深ク人心ニ扶植セラレ更ニ「ワシントン」「リンコーン」等ノ人傑出デ之ヲ哺育培養シ同國建国ノ一大精神ヲ成セリ故ニ今日日月ノ推移ト共ニ多少其影ヲ淡クセリト雖モ尚其觀念ハ市民ノ内ニ磅礴シ時ニソノ光彩ノ陸離タルモノ無キニ非ズ然レバ排日熱ノ最モ鬱勃セル沿岸諸州ニ在リテモ敢テ群議俗論ヲ排シ大胆ニ正義ノ大纛ヲ翳シ挺身同胞ノ援護ニ赴ク所謂親日家其人ニ乏シカラズ

(六)

之ニ反シ英國ハ由來帝国主義ノ発祥地ニシテ日影ノ其領土ニ没スルコト無キヲ以テ自ラ誇リトシ他ノ国民及民族ノ利益ヲ殺イデ我国ヲ利セントン正義ノ觀念ハ其帝国主義將タ

「アングロサクソン」人ノ利益又ハ自尊心ヲ傷ケザル範囲ニ於テ之ヲ認ムルニ過ギズ即チ利害ノ打算ヲ外ニシテ曾テ正義ノ存スルコトナシ

(七)

為ニ當州ニハ幾ソド声ヲ揚ゲテ排日ヲ駁セントスルモノナク親日家トモ称スベキハ僅ニ口ヲ緘シテ排日ヲ號バザルニ

止マレリ然レバ米国ニ在リテハ總ジテ商業會議所ノ如キハ常ニ排日ノ俗論ニ左祖セズ寧ロ両國ノ關係ヲ親善ナラシメシコトニ留意スト雖モ當州ニ在リテハ個人又ハ國体中我味方ト頼ムベキモノ一トシテ存セズ商業會議所ハ寧ロ排日ノ先鋒トシテ活動シ居レリ

(八)

米国ニ於テハ憲法ノ正条明カニ各人権利ノ平等ヲ保証セリ故ニ中央將タ地方政府ニ於テ偏頗的立法ヲ見ルコトアランニハ逕ニ訟廷ニ訴ヘ之レガ理否ヲ分ツコトヲ得ルト雖モ当領ノ憲法トモ認ムベキ North American Act ハ主トシテ聯合諸州ト中央政府間ノ權限ノ分配及活動ノ分野ヲ規定シ各人権利ノ平等ニ闕シ言及スル所無シ

(九)

故ニ中央政府並ニ地方政府ハ「ノース、アメリカン、アクト」ニ規定セラレタル範疇ヲ脱セザル限り各自政策ノ命ズル所ニ從ヒ諸種ノ立法ヲ試ミルコトヲ得即チ當州選挙法ノ如キ日本人其他亞細亞人ニハ英國市民トシテ籍ニ列スルモノト雖モ選挙権ヲ褫奪シ法律上同一市民中ニ二個ノ階級アルコトヲ明カニセリ

(10)

殊ニ「ライセンス」ヲ要スル營業ノ如キニ至リテハ無資格者(Disqualification)トシテ巧ニ區別的待遇(Discrimination)ヲ為スコトヲ妨げズクシテ偏頗的立法ト相俟チ日本人系加奈陀市民ヲ虐スルコト甚シ

(11)

而シテ當市在留邦民ハ概括シテ智能的ニ將タ經濟的ニ米国在留邦民ニ比シ下リ排日ニ對スル自省訓練ニ於テ又甚シク劣レルモノアリ而シテ個人トシテモ亦克ク内外人ノ信望ヲ博シ内邦人ヲ啓發シ外白人ニ対シ我邦民ノ真価ヲ發揚理解セシムヘキ材器ヲ有スルモノ無シ

(11)

現下ノ状勢上述ノ如シ故ニ我ヨリ進ンデ排日ノ蒙ラ啓キ我主張ヲ闡明スル所ナカラニハ只排日ノ声ノミ世上ニ流布浸潤シ歲月ノ経過ト共ニ歩一步我邦民ノ立場ヲ困難ナラシメ次代ノ青年活躍ノ時期ニ入ルモ米国ニ於ケルガ如ク邦民擡頭ノ機會ヲ有スルコト無シ

(111)

故ニ排日対応ノ大策ヲ講ジ適當ナル機関ヲ設ケ機宜応変ノ

爰ニ於テカ人衆ニ接スルコト一層普遍的ニシテ効果ノ大ナルモノヲ撰ムノ要アリ而シテ此目的ニ副フモノ恐ラク印刷物ニ依ル宣伝ノ右ニ出ヅルモノ無カルベシ而モ此種宣伝モ姑息間歇的ナランニハ唯ダ徒ラニ反対論ヲ激成シ敵ノ宣伝ヲ滋カラシムルニ訖リ畢竟我宣伝ハ却テ敵ニ宣伝ヲ行フノ機會ヲ釀リ之カ器タルナキニ非ズ

(16)

九 「カナダ」ニ於ケル本邦移民排斥関係一件 一九九

二四二

然レバ一タビ宣伝運動ニ著手セんカ少クトモ排日家ト相頼抗雁行シテ進ミ飽クマデソノ所報所論ノ虚構誤謬ヲ弁駁是正シ不斷応酬奮戦決シテ彼ニ下ラザルノ準備ト機関トヲ備ヘザル可カラズ否ラザレバ寧ロ初ヨリ緘默ヲ守ルヲ以テ遙ニ優レリト信ズ

(一七) 上記宣伝機關トシテ何物ヲ利用センカ是レ蓋シ次ノ問題ナルペシ一紙ヲ創設スル素ヨリ可也ト雖モ費用ノ大之ヲ許サザルモノ有ル可シ隨時冊子ヲ印刷シ無料配布スルトスルモ

自然配布先ニハ制限ナキ能ハズ各種ノ階級ヲ通ジ之ヲ遍達セシムルハ決シテ期シ得ベキニ非ズ而モ宣伝ノ要アル愚衆ト智者トヲ分タレズ

(一八) 加之排日弁駁一點張リノ読物ハ縱令無料ニテ之ヲ配布スルモ本問題ニ特別ノ興味ヲ有スルモノニ非ザレハ初メヨリ之ニ觸目スル所ナク直ニ故紙籠中ノモノト化シ一般民衆教育ノ具トシテ大效ナカルベシ

(一九) 故ニ広ク一般民衆ニ訴フルノ宣伝機關トシテハ有力ナル日

而已ニ偏シ他方トノ連絡ヲ缺クトキハ一方ノ主張ニ対シ却テ他ヲ駆テ反対ノ態度ニ出デシムルナキニ非ズ

(二一)

以上ノ如ク二紙トノ了解ヲ得タリトスルモ排日論ニ対スル

応酬弁駁ヲ挙ゲテ両紙ニ求ムルハ難シ故ニ克ク我事情ニ通

ジ且単ニ金錢ニ頼リテ筆ヲ左右ニセザル底ノ人物ヲ得テ該

運動ヲ指導シ且自ラ応戦ノ衝ニ当ラシムルヲ要ス而シテ之ニハ邦人ヨリモ白人ヲ可ナリトス

(二三) 幸ニ上記ノ如キ人物ヲ得タリストスルモ材料ノ蒐集将々翻訳等ノ業ニ從事セシムルタメ邦人助手ノ配属タイピストノ雇傭事務所ノ借入及事業經營ニ伴フ消耗品其他ノ雜費ヲ要ス

(二四) 今以上ノ方法ニ依リ対抗運動ヲ開始スルモノトシ所要ノ年費額ヲ概算スルニ如左

サン紙操縦費 三千五百弗
ウォールド紙同上 三千五百弗

指導者給料 六千弗
邦人助手同上 三千弗

九 「カナダ」ニ於ケル本邦移民排斥関係一件 一九九

刊新聞ヲ操縦シ之ヲ利用スルニ若カザルヘシ而シテ當州ニ於テ多數ノ購読者ヲ有シ最モ勢力有ルモノトシテハ左ノ五紙ヲ挙グヘシ

Sun () 民主党 // (二万七千
World () // 一万八千

Colonist (Victoria) 保守党 // 一万一千
Times () 民主党 // 一万

Province (Vancouver) 中立 発行部数六万二千
(110) 「プロヴィンス」紙ハ発刊部数大ナル而已ナラズ其所論概ね中正穩健ニシテ最モ世上ニ信用ヲ有スト雖モ社説鞏固ナルヲ以テ同社ノ主義並面目上容易ニ他ニソノ紙面ヲ許スコト勿ルベシ然レドモ「サン」及「ウォールド」ノ貳紙ニ至リテハ利ニ敏ク之レガ為ニハ意見ヲ一ニシテ悔イズ故ニ之ニ喚ハスニ相当ノ利ヲ以テセバ其紙面ヲ利用スル必ズシモ難カラザルベシト思考セラル

(二一)

而シテ両紙ハ共ニ州政府党即チ民主党系ニ属スト雖モ營業上並ニ党界ニ於ケル勢力争奪上相對峙シテ下ラズ故ニ一方

タイピスト同上 九百弗
事務所家賃 六百弗

クリスマス手当 八百武拾五弗

筆紙墨文具自働代其他雜費 六百七拾五弗

合計 一万九千弗

(二五)

上記操縦費ハ素ヨリ先方ト相当ノ折衝ヲ試ムルニ非ザレバ之ヲ確定スルコト能ハズト雖モ前記費額ヲ準備シ置カソニハ相当利用シ得ルナラント称セラル又白人指導者給料ハ其人ニ依リテ之ヲ異ニセリト雖モ排日ノ衝ニ立チ此種ノ事業ヲ担当セシメントスルニハ上記ノ金額ヲ下ル能ハザル可シト云フ

(二六)

而シテ本事業ノ成否ハ一ニ指導者其人ヲ得ルノ如何ニ係ルヲ以テ其後当地邦人在留者ノ故老ニ聞キ留意物色ニ努ムルト雖モ第七項記載ノ如ク當州ニ在リテハ利害ヲ外ニシ敢然立ッテ此業ニ膺ルベキ人士ヲ見ズ故ニ此際直ニ宣伝ニ着手セントセバ從來米國又ハ本邦ニ於テ此種事業ニ從事シタルノ士ヲ撰ビ當地ニ派遣セラレン事ヲ希望ス

二四三

九 「カナダ」ニ於ケル本邦移民排斥関係一件 一九九

一四四

(二七) (註)

前電ニ記載シタル McIntosh 氏ハ故「ハリス」監督ノ甥ニ当リ「ハリス」夫人病臥ノ際同家ニ雇ハレ居レル邦人婢女ガ骨肉モ啻ナラザル熱情ヲ以テ其看護ニ從事シタルニ深ク感得シ邦人ニ対スル温情ヲ厚フシ先キニ「シャトル」米化会ガ其人ヲ求ムルニ際シ之ニ投ジ努力尽瘁スル所アリ其結果不慮ノ奇禍ヲ購ヒ同地ヲ去ラザル可カラザルニ至リ目下桑港方面ニ客寓シツツアリト云フ

(二八)

本官ハ未ダ同氏ト面識ナク其用フベキ否ヤニ関シ智識無シ故ニ愈々之ヲ起用セント欲スレバ米化会ニ就キ予メ同人ノ経歴並材能等ヲ探知スルノ要アリ尚近ク本官桑港ニ出張セバ同人ニ会見シ加奈陀ニ於ケル排日対策ニ関シ本人ノ所見ヲ敵キ以テ其人ト為リヲ知ラント欲ス

(二九)

次ニ上記ノ宣伝ハ何レノ事業トシテ之ヲ行フベキヤ日本人会ノ如キ之ニ充ツルヲ得バ最モ恰適ナルベント雖モ同会ノ事業ハ幾ンド細大トナク多數役員ノ合議ニ待タザル可カラザル組織ナルニ加ヘ役員ハ選挙ニ依リ選出セラレ交替常ナ

(三一)

宣伝ニ依ル排日対応策ハ右ニ記セリ然レドモ排日ハ文壇上ノ応酬対戦ニ依リテ其勢力ノ幾分ヲ減殺スペキヤ論ナシト雖モ之ニ依リテ議会ニ於ケル排日ヲ窒息セシムルハ難シ故ニ之ニ対シ何等カノ方策ヲ講ズルニ非ザレバ折角ノ宣伝モ其效ノ大半ヲ失フナキヤヲ恐ル

(三二)

故ニ能フベクンバ州議会内ニ於ケル有力党ト通ジ州議会内ニ於ケル雰囲気ノ甚ダシク排日のナラザランコトヲ希ニ如カズ而シテ從来日本人会ニ出入スル白人中大ニ之ヲ勧奨セルモノアリシト雖モ同会ニテハ之ニ充ツルノ資金ナキヲ以テ深ク是等ノ言ニ耳ヲ傾クルコトヲ敢テセザリキ

(三三)

故ニ本運動ハ今直ニ之ヲ実行シ得ベキヤ否ヤヲ知ラズト雖モ既述ノ金額御支出ノ望アランニハ更ニ之ヲ精查セシメント欲ス然レドモ若シ其望ナカラニハ苟モ恁ル危険陰密ナル運動ニ著手シ猥リニ他ノ嫌疑ヲ招クガ如キコトナカラニコトヲ期ス右疾クニ御回答可致ノ処指導者其人ニ関シ問合セ置候向キ有之無益ニ此方ヨリノ回答ヲ俟チ居候為意外ニ迂緩致候得共ニ爰貴答申進候

追而

第二十三項記載ノ邦人助手ハ此地ニ於テ全ク其人ナキニ

非ザレドモ必ズシモ適材ト称ス可カラザルヲ以テ若シ本計画御实行ノ曉ハ本邦ニ於テモ一應御詮議有之度添テ申進候克ク其目的ヲ達成シ得ルノ手腕ヲ有スルモノ有リヤ否ヤ是亦本官ノ大ニ危ム所ナリ

(三五)

然レドモ当地政界ノ現象ガ常ニ暗黒ナル半面ヲ有シ是等裏面ニ於ケル運動ガ政局ヲ左右スルニ偉大ナル勢力ヲ有スルハ少シク政情ニ通ズル者ノ一般ニ知悉スル所ナルト共ニ一面此際何等カ策ノ施ス所ナクンバ來ル州会ニ於ケル排日ノ趨勢如何ナルベキヤ略之ヲ予測スルニ難カラズ

九 「カナダ」ニ於ケル本邦移民排斥関係一件 一九九

ラザルヲ以テ斯カル機密ニ閲スル事業ヲ同会ヲシテ經營セシムルハ決シテ望ム可カラズ

(三〇)

故ニ本事業ハ当地在留邦人有志ノ擧ニ出ヅルモノトシ邦民中ヨリ一、三ノ適任者ヲ撰ミ他ト交渉ナク独立シ竊カニ領事館ト連絡ヲ通ジソノ監督ノ下ニ其業ヲ進ムルコト可ナリト信ズ

(三一)

機密第一四号排日対応策ニ閲スル件

本件ニ閲シ客月十七日附機密第一三号拙信ヲ以テ及稟申置候處右拙信第二七項「マッキントン」ニ閲スル記述中其後誤聞ニ係ルモノ有ルコトヲ確カメ候ニ付本項ハ削除相成度此段申進候 敬具

九 「カナダ」ニ於ケル本邦移民排斥関係一件 一一〇〇 一一〇一

一一〇〇 六月十八日 在オタワ太田總領事ヨリ

内田外務大臣宛(電報)

東洋人移民排斥決議ニ關シカナダト日本及中

国トノ交渉結果承知シ度旨下院議員首相ニ要

求ノ件

第四一号

(六月二十一日接受)

B・C州選出下院議員 McQuarrie ハ六月十七日「キン
グ」首相ニ對シ先般ノ東洋移民制限決議ニ對スル政府ノ政
策及最近來加セル支那公使並在当地日本總領事トノ交渉ノ
結果ヲ議会閉会前ニ承知シ度キ旨ヲ要求セルガ首相ハ政府
ノ政策ハ有効ナル制限ニ在リ又右ニ関スル商議ハ未だ終了
セザルニ依リ今会期中ニ報告シ得ザルベシト答ヘタリ
晚香坡ヘ郵送セリ

一一〇一 七月十八日 在ヴァンクーバー 斎藤領事ヨリ
内田外務大臣宛

B・C州有林地租借者ノ東洋人使用禁止令

確認法ニ關スル加奈陀大審院ノ裁決ニ對シ英

本国枢密院ニ上訴ノ件

公第二一〇三号 (八月七日接受)

Brooks Bidlake and Whittall Ltd. (内実州有林地租
借者一同ヲ代表スルモノ) ノ両訴訟ニ於テ加奈陀大審院ノ
裁決ガ前者ニ在リテハ幸ニ日本人会側ニ有利ナリシト雖モ
後者ニアリテハ却テ州政府ノ勝訴ニ終リタルヲ以テ租借者
側ニ於テハ英本国枢密院司法委員会 (Judicial Commit-
tee) ニ上訴ノ手続ヲ取ルニ至レル次第ハ本年七月十八日付
公第二一〇三号ヲ以テ申進置候通ニ有之候處右上訴費用ハ会
社側ノ本訴引受弁護士在倫敦 Messrs. Bischoff Coxe &
Co. ノ見積ニ依リ敗訴ノ場合ニ約八百磅此換算加賃三千五
百八十八弗ヲ要スベキ計算ニテ会社側ニ於テ既ニ千餘弗ヲ
醸集シタルモ尚残餘二千五百弗ノ不足ヲ告ゲ居ルヲ以テ該
訴訟ノ成否ニ大ナル利害關係ヲ有スル日本人側ニ於テモ其
費用ノ一部ヲ負担セラレ度旨B・B・& W. Ltd. 会社ヨリ本官
ニ申出ノ次第有之候ニ付本官ハ之ヲ当地日本人会ニ移牒シ
従事スルノ途ヲ杜塞シタルモノニシテ英本国ニ於ケル枢密
院ノ判決ニ依リ加奈陀大審院ノ判決ヲ覆サザル限り從来日
本人会ガ該訴訟ノ為支出シタル費用モ事実之ヲ水泡ニ帰セ

東洋人ヲ使用スルコトヲ禁止スルB・C州政府閣令確認法
ニ關スル裁決ニ於テ加奈陀大審院ガ同法ヲ以テ憲法並日加
条約ニ抵觸スルモノトシ同確認法ノ関スル限り州政府ヲシ
テ敗訴ニ帰セシメ當地日本人会側ノ主張ハ貫徹シタリト雖
モ同時ニ同院ハ州林地租借者タル Brooks, Bidlake &
Whittall 会社、州政府間ノ契約ニ關シテハ同契約中東洋
人ヲ使用セサルコトノ条件ヲ包含シ該条件ニシテ不法ナ
ランニハ該条件ノミナラズ「ライセンス」全部無効ナルベ
ク即チ契約ノ一部ヲ有効トシ他ノ一部ヲ否認スベカラズ若
シ又該条件ニシテ有効ナランニハ同伐木業者ハ本訴ニ於テ
何等理由ナキモノト断ジ会社側ニ不利ノ裁決ヲ与ヘ結局理
論上既記東洋人使用禁止法ハ無効ニ帰シタルモ實際上州有
林地ニ於テハ東洋人ヲ使用スルコト能ハザルコトナリタ
ル次第ハ本年三月二十二日附第七五号ヲ以テ及御送付置候
判決文写ニヨリ御承知ノ通ニ有之前記B・B・W会社側ニ

大正十一年七月十八日 在晚香坡 領事 斎藤 和(印)

外務大臣伯爵 内田 康哉殿

外務大臣伯爵

内田 康哉殿

大正十一年十月五日 在晚香坡 領事 斎藤 和(印)

公第二一七八号 (十月三十日接受)

B・C州閣令確認法ニ關スル加奈陀大審院ノ
裁決ニ付英國枢密院ニ上訴ノ費用日本人会ノ
於テ一部負担ノ件

写送付先 在英大使在オタワ総領事
内田外務大臣宛 (ヴァンクーバー 斎藤領事ヨリ)

一一〇二 十月五日 在ヴァンクーバー 斎藤領事ヨリ

九 「カナダ」ニ於ケル本邦移民排斥関係一件 一一〇一

B・C州閣令確認法ニ關スル日本人会对州政府及州政府對
外務大臣伯爵 内田 康哉殿

九 「カナダ」ニ於ケル本邦移民排斥関係一件 一一〇一

二四七

九 「カナダ」ニ於ケル本邦移民排斥関係一件 二〇三

一四八

シメタルト撰ブ所ナキヲ以テ租借者側ニ於テ進ンデ本上訴ヲ提起シタルヲ幸ヒ我ニ於テモ此挙ヲ援助シ同費用ノ一部ヲ分担シ此際彼等ニ対シ相当同情ノ意ヲ表スルハ後日必要ニ際シ彼等ノ同情ヲ博スル上ニ於テ大ニ効果有ル可クト思考セラル旨ヲ告げ置キタリシガ日本人会ニ於テハ特ニ役員会ヲ開キ熟議ノ結果右費用トシテ加賃毫千弗ヲ釀出スルコトニ決シ客月十八日右金額ヲ会社側ニ交附シタル趣ニ有之候右及報告候

本信写送付先 在オタワ總領事在英大使

敬具

二〇三 十一月八日 在オタワ太田總領事ヨリ 内田外務大臣宛（電報）

カナダ在留日本人ニ登録ヲ為サシムルキング

首相案ニ対スル回答方ニ付請訓ノ件

第六四号

（十一月十一日接受）

貴電第二五号御訓令ノ謝意伝達ノ為七日「キング」首相ヲ訪問シタル處右用談後首相ハ聊相談シタキコトアリトテ本官ヲ引留メ政府ハ目下次ノ議会ニ対スル諸問題研究中ニシテ東洋ニ関スル問題ニ就テモ前議会ヨリノ関係上將又B・C州最近ノ形勢上是非何等カ工夫ヲ要スル為内務大臣（移

民兼任）ト種々協議ノ結果在留日本人ニ英國臣民同様ノ登録ヲナサシムルヲ最モ適當ノ方法ト考へ居ルコトヲ述べ之ニ対スル本官ノ所見ヲ求メ尚本官ノ質問ニ対シ右英國人民トハ東印度人ヲ指スモノニシテ其ノ入国取締ニ関シテハ本年九月「サストリ」氏來加ノ折商議シタルコトアリ而シテ右方法ヲ日本人ニ適用スルハ全ク西部ノ排日運動ニ対抗ゼンガ為ニシテ自然前者ト目的ノ異ナルコトヲ説明シ更ニ他ノ質問ニ対シ日本人ニシテ帰化セルモノニハ適用セズ彼等ハ必要アレバ帰化証ヲ呈示セバ可ナリト答へ又日本人ハ旅券ノ呈示ニテ充分ナラズヤトノ質問ニ対シ此方法ハ西部特ニB・C州排日家ガ日本人ノ密入国者多キコトヲ声言シ居ルニ対シ取締励行ノ実ヲ示スト共ニ兼テ反証的材料トスル積ナルヲ以テ旅券以外ニ加奈陀官憲ノ証明書ヲ所持セシムル仕組ニシテ寸毫モ排斥ノ意味ヲ有セズ寧ロ反対ニ排斥反駁ノ為ナルコトヲ附言シ且末ダ秘密ニシ居ル處ナルモ支那人ニ就テハ入國金ヲ廢スル代リニ入國ノ絶対禁止ト殆ド同一ナル「アレンジメント」ヲ作ル筈ナルモ日本人ニ対シテハ不正入國取締ヲ理由トシ單ニ右登録証明ノ方法ヲ施サント

ハズ他ニ良法ヲ見出サザル限政府ヲ窮地ニ陥レ却テ條約廢棄若ハ移民制限ノ方向ニ傾カシムル虞有ルハ議会ノ形勢ニ鑑ミ否定シ難キ所ナルト又一方米国ニ比シ不正入國者ノ遙カニ少數ナルベキ當領ニ於テハ登録ハ日本人ニ取り各國ニ於ケル程ノ大問題ニハ非ザルベシト存ゼラルニ付相当ノ条件ヲ付シ主義ニ於テ異議無キ旨ノ回答ヲ与ヘ政府ヲシテ（脱）ヲ有スル事柄ナルニ依リ一応在晚領事ノ意見ヲ徵セラレタル上何分ノ御回訓ヲ請フ

晚香坡ヘ転電シ在英大使ヘ郵送セリ

註 外務大臣発第二五号ハ天長節祝辞ニ対スル謝意伝達ヲ訓令

セル電報ナリ

二〇四 十一月二十二日 在ヴァンクーバー斎藤領事ヨリ 内田外務大臣宛（電報）

カナダ在留日本人登録ノキング首相案ニ反対

ノ意見稟申ノ件

（十一月二十四日接受）

充分ノ誠意ヲ認ムベキ理由アリ從ツテ之ニ不承諾ヲ唱フルハ其ノ理由ノ他外国人ニ比シ不平等ナルコト乃至日英条約違反（第一条第一項トノ関係ニ付疑問アルモ）ニ在ルヲノ付テハ政府ト反対党トノ間不言ノ内ニ意思ノ扞格セルモノアリ政府ハ日本移民ノ入國ヲ現在以上ニ制限スルノ困難ナル事情ニ想到シ居ル為結局前記ノ方法ヲ案出シ日本移民ノ関係ニ於テハ不正入國取締ヲ以テ有効制限ニ対スル責ラ防グ傍将来必要有ラバ之ヲ論拠トシテ排日家ニ密入國ノ証拠提出ヲ迫ラムトスルモノニシテ「キング」首相ノ説述ニハ

九 「カナダ」ニ於ケル本邦移民排斥関係一件 二〇四

二四九

九 「カナダ」ニ於ケル本邦移民排斥関係一件 二〇五

二五〇

對禁止ハ差迫ルコトニアラザルハ明瞭ナルモ屢報ノ如ク當州ニテハ殆ド擧ゲテ絶対禁止ヲ唱道シ目今州會議ニ上リ居レル東洋人排斥決議案モ政府案ト反対党側ノ修正案等ト帰着ノ点ニ於テハ毫モ異ル所ナク又米國ニ於ケル排日ノ歴史ニ徵スルモ隠ヲ得テ蜀ヲ望ミニ仮令登録制度ヲ採用スルモ之ニ依リテ排日潮流ヲ緩和セントコトハ至難ニシテ早晩新移民ノ絶対禁止ヲ見ザレバ已マザルベク其ノ曉ニハ登録制度ニ加フルニ新移民ノ絶対禁止（在留民ノ妻子呼寄ハ元ヨリ我ニ於テ飽迄主張スベシ）ヲ以テセラルニ至ルベシ尤モ太田總領事ノ所謂相當条件ノ一トシテ「ルミュー」協定ノ継続ヲ前提ノ変更又ハ廃止ノ場合ニハ登録制度承認ノ撤廃ヲ取極メ置クモ当地ノ形勢切迫シ前記絶対禁止ヲ我ニ於テ承認セザル可カラザル迄進ミタル場合ニ加奈陀政府ガ国内法ニ依リ制定シ現ニ実施シ居ル登録制度ヲ事實上撤廃セシメ得ベキヤ否ヤハ頗ル疑問ナラズトセズ加フルニ一旦差別的立法ヲ許容スルノ例ヲ開始スルトキハ将来ニ其ノ禍ヲ胎スベケレバ差別的立法ハ当初ヨリ断然之ヲ謝絶シ如何ナル場合モ毫モ之ヲ容ルルノ余地ナキコトヲ明カニシ代フルニ若シ此際何等カノ讓歩ヲ余儀ナシトセバ「ルミュー」協定ニ

依リ保留シタル家内使用人及定着農夫呼寄ノ二者ニ限り我ハ右種ノ移民四百人迄ヲ送リ得ベキモ今日實際ニハ四百人ニ上ラズ斯カル少數ノ移民送附ノ為無智ノ一般公衆ニ多數移民ノ流入シツツアルガ如キ感想ヲ附与スルハ必ズシモ智者ノ意ニアラザルベシ尤モ排日家ハ決シテ飽カシメ難ク今日我ニ於テ退讓スル時ハ更ニ一段ノ侵蝕ヲ敢テスベキニ付家内使用人等ノ呼寄放棄ハ實際ニ於テ然迄大ナラザル迄モ今日敢テ差迫リタルコトニモアラザレバ後日讓歩ノ余地ヲ存スル為最後迄之ヲ保留スルト優劣果シテ如何ナル可キヤ考慮行フコトヲ我ノ承認スルト優劣果シテ如何ナル可キヤ考慮ノ値アリト思考ス尚当國ニハ脱船及他人ノ帰化証ニ依ル不正入國者意外ニ多數ナルヤモ計リ難シ

カラズト雖モ當國ガ國內法ニ依リ差別的登録制度ノ制定ヲ

正入國者意外ニ多數ナルヤモ計リ難シ

「オタワ」ヘ転電セリ

二〇五 十一月二十二日 在オタワ太田總領事ヨリ

力ナダ在留日本人登録ノキング首相案ニ異議

ヲ挾マザル方得策ナルベキ旨稟申ノ件

第六五号

（十一月二十四日接受）

在晚領事往電第一五号ニ關シ排日家ガ隠ヲ得テ蜀ヲ望ムハ事実ナルト共ニ此点ヨリセバ仮令「ルミュー」協定ノ渡航ヲ廃止スルモ彼等ハ更ニ進ンデ家族呼寄等ノ廃止迄モ要求スルニ至ルベキコト米國ニ於ケル幣原「モ里斯」協商ノ内容ニ徵スルモ想像ニ難カラズ而シテ一旦協定現状ノ維持ヲ失セバ後難ハ堤ヲ決スル如ク至ルナキヲ保セザルニ依リ現協定ヲ動カスハ最モ慎マザルベカラズ况シヤ之ヲ改作スルガ如キハ諸般ノ事情ニ鑑ミ絶対ニ不可ナリ然ルニ一方在留登録ハ差別取扱トハ言ヘ私權ノ享有行使ニ関セズ一種ノ行政的立法ニシテ米國等ノ移民官ガ国境地方ニ於テ日本人支那人等ニ限り特別ニ取調居ル現在ノ事實ト性質上ノ差異ナク一種ノ不正入國取締方法ト認ムルヲ得ル以上之ヲ以テ彼ヲ代フハ實益上ハ勿論名義上ヨリスルモ甚ダ適當ナラズ而シテ本使ハ今回「キング」首相ノ申出ヲ聞キ以前ニ想像セシ所ト比較シ寧ロ我ニ好都合ノモノト考ヘ之ニ現行条約及協定ニ影響ヲ及ボサズ又差別待遇ノ事例ト為スベカラズト言フガ如キ条件ヲ附シ（先方が承諾ストハ必ズシモ予断シ得ザルモ）容認スルニ於テハ比較的少數ナル不正入國者

九 「カナダ」ニ於ケル本邦移民排斥関係一件 二〇六

二〇六 十二月八日 内田外務大臣ヨリ
キング首相提案ノ邦人登録案ニ同意シ難キ旨
首相へ回答方をオタワ總領事へ訓令ノ件
附記一 本件電信案ニ添附ノ四統計表

二五一

第一一号

在「オタワ」總領事へ左ノ通転電アリタシ

貴電第六四号ニ関シ「キング」首相カ貴官ニ内話セル登録制度案ハ條約問題ヲ別ニシ左ノ諸点ニ於テ到底同意シ難シ

(一)該制度ハ日本人ニ対スル差別立法ニシテスル立法ヲ容認スルトキハ帝国政府カ先年來「ルミュー」協約ニ依リ始終一貫誠実ニ移民ノ自發的制限ヲ実行シ来レルコトハ無意義ノモノトナルヘシ

(二)旅券ニ依リ一旦正當ニ入國シタル者ニ対シ入國後ニ於テ更ニ登録証明ヲ強要スル如キハ二重ノ取締ニシテ一部不正入國者ノ為善意ノ渡航者ノ蒙ル不便迷惑尠カラス現行加奈陀移民法ノ規定(不正入國者ノ訊問逮捕追放等)ハ不正入國者ニ対シ充分ナル取締ヲ為スヲ得ヘク日本人ニ限り特別ノ取締法ヲ立ツル必要アリト認メ難シ然ルニ斯ル特別立法ニ依リ本邦ヨリ渡航スル正當旅行者モ一樣ニ律セラルルコトナランカ其結果加奈陀官憲ト是等旅行者トノ間ニ不快ナル出来事ヲ釀成シ之カ為兩国民ノ感情ハ刺撃セラレ延テ日加ノ親善ニ累ヲ及ホスノ虞アリ

ノ再考ヲ促サレ應対振報告アリタシ

尚過去十年間ノ統計ニ徵スルニ(貴館編 *Facts about Japan in Canada* 参照)加奈陀新渡航本邦移民数ハ平均一ヶ年六百名内外ニシテ其大部分ハ在加者ノ呼寄ニ依ル妻子ニ係リ「ルミュー」協約ノ際我政府カ一ヶ年ヲ通シテ四百名ヲ超エサルヘキヲ言明セル家内使用人及農業經營ニ從事スル農夫数ハ合セテ平均一ヶ年百二十名ニシテ言明數ノ三分ノ一二モ達セス又同年間ニ於ケル渡航移民(再渡航

(附記一) 本件電信案ニ参考トシテ添附ノ四統計表

第一表

	過去十年間ニ於ケル英領加奈陀渡航者及帰国者表				
	大正元年	二年	三年	四年	五年
	夫ノ若クハ 父母呼寄	初 渡 航 家内使用人	定着農夫	計	渡 航 者
大正元年	五七四	四八			
二年	六六八	五六	一 一 四		
三年	五五〇	四二	一 一 七		
四年	三四七	二五	二 二		
五年	四一〇	六二	五二		
				再渡航移民	
				非 移 民	
				三 等 船 客	
				一、二 等	
				船 客	
					帰 国 者

者ヲ含ム)數ト帰国者数(移民ノミノ統計無キヲ以テ三等船客数ニ依ル)トヲ比較スルトキハ各年ニ於テハ増減区々ナルモ平均数ニ於テハ帰国者ノ數幾分多キヲ以テ加奈陀ニ於ケル在留邦人ノ增加ハ渡航者ノ增加ヨリ来ルニアラス主トシテ出生即チ自然ノ增加ニ依ルモノト認メ得ヘシ是等ノ事實ヲ指摘シテB・C州議員等カ「ルミュー」協約ヲ攻撃スルノ誤レルヲ適宜同首相ノ注意ヲ喚起シ置カレタシ

(三)不正入國者問題解決ノ為登録制度ヲ設定セントノ議ハ米國政府ニ於テモ屢提唱シタル所ナルモ我ハ差別立法タル故ヲ以テ毎ニ強硬ニ反対シ来レル所ニシテ加奈陀ニ対シテノミ異議ヲ唱フルニハアラズ因テ貴官ハ首相ニ対シ極メテ懇談的ニ同相カ常ニ公平ナル態度ヲ以テ日加親善ノ為B・C州ニ於ケル排日氣勢ノ緩和ニ努ムル誠意並苦心ハ帝国政府ノ多トスル所ニシテ殊ニ今回ノ提案ハ対内關係ニ於ケル同首相ノ立場ヲ内示シテノコトニモアリ我ニ於テモ之ニ対シ全然無関心ナルニハアラサルヲ以テ同氏ニ於テ対内政策上強ヒテ不正入國者ノ取締ヲ標榜スル必要アリトセハ一般外国人ニ対スル現行移民法上不正入國取締ニ関スル規定ヲ励行シ其ノ結果トシテ厳密ニ在邦人ノ旅券検閲ヲモ施行スル如キ行政上ノ取締方法ヲ採ル場合(此場合盜難、紛失等ニ依ル旅券ノ不所持者ヲ保護スル為領事館ニ於テ旅券ニ代ルヘキ証明書ヲ發給シ之ヲ加奈陀官憲ニ認メシムル手段ヲ講スル必要アルハ勿論ナリ)ハ我ニ於テ異議ナキノミナラス之ニ対シ出来得ル限りノ協力ヲ惜マサルヘキモ前述ノ如ク我在来ノ方針ニ反スル登録制度ノ制定ニハ反対セサルヲ得サル旨ヲ述ヘテ同首相

九 「カナダ」ニ於ケル本邦移民排斥関係一件 二〇六

年次	大正元年	二年	三年	四年	五年	六年	七年	八年	九年	十年	計
渡航(移民)	一、〇二八	一、二七〇	一、三〇六	一、二四四	一、二〇五	一、一六〇	一、一六〇	一、一六〇	一、一六〇	一、一六〇	五、〇二八〇
帰国(船客)	五〇八	五二六	五〇八	五〇一							
増渡航者ノ	二四四	四九一									
減渡航者ノ	六二	六八五									

第一表

渡航及帰国移民累年比較表（加奈陀）

年次	大正元年	二年	三年	四年	五年	六年	七年	八年	九年	十年	合計
渡航(移民)	一、〇二八	一、二七〇	一、三〇六	一、二四四	一、二〇五	一、一六〇	一、一六〇	一、一六〇	一、一六〇	一、一六〇	五、〇二八〇
帰国(船客)	五〇八	五二六	五〇八	五〇一							
増渡航者ノ	二四四	四九一									
減渡航者ノ	六二	六八五									

第三表

本邦側調（加奈陀在留本邦人員數）

合計	其他	晩香坡市	オタワ市	大正六年	大正七年	大正八年	大正九年	大正十年
一三、四	一〇、二五	三、二〇七	二	一	二	三、二二	四、九〇	五、六五
〇五、九八	八、七五	一、一、二	二	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇
一六、五〇	五、五〇	一、二、五	一三	一	一三	一三	一三	一三
六七八	六、二四	一、二、六	一一	六、六七	六、六七	六、六七	六、六七	六、六七
六二七	九四九	一、一、九	一一	一	一	一	一	一

第二表

第四表

加奈陀側調

(加奈陀國勢調査一九二〇年十月一日現在)

本邦側調

(海外各地在留本邦人職業別人口表一九二〇年六月末調)

地名	別	男		女		計
		晩香坡市	英領(コロンビア) (晚香坡ヲ除ク)	三、六一九	二、〇三二	
アルバータ	一	七、五九三	二八七	三、六二三	二、〇三二	三、六二三
ミニトワ及 ユーリクン	一	一、一四	一、一四	一、一四	一、一四	一、一四
サスカッチワ ン	一	四八	四八	三三	三三	三三
オンタリオ	一	一七二	一七二	二二	二二	二二
ニューブランズ イウイク	一	一九	一九	三	三	三
クィベック	一	一一、八五三	一一、八五三	五、八三八	五、八三八	五、八三八
合計	計	一一、八五三	一一、八五三	五、八三八	五、八三八	五、八三八

地名	別	男		女		計
		晩香坡市	英領(コロンビア) (晚香坡ヲ除ク)	三、七四二	二、七四六	
アルバータ	一	八六七	一五三	三四	一八七	八六七
ミニトワ及 ユーリクン	一	一九三	一九三	二三	二三	二三
サスカッチワ ン	一	一七二	一七二	一七二	一七二	一七二
オンタリオ	一	一一、六九一	一一、六九一	一二、六九一	一二、六九一	一二、六九一
ニューブランズ イウイク	一	一一、八五三	一一、八五三	五、八三八	五、八三八	五、八三八
クィベック	一	一一、八五三	一一、八五三	五、八三八	五、八三八	五、八三八
合計	計	一一、八五三	一一、八五三	五、八三八	五、八三八	五、八三八

備考 一九二〇年十月一日現在ニ於テ同國ニ帰化セル日本人ハ七、七二三名ナリ

(附記二)

キング首相ノ提案対策（通商局移民課作成ノ調書）

第一、「キング」首相ノ太田總領事ニ内示セル登録制度設置案ニ応スヘキヤ

スル登録制度カ日英条約（第一条第一項）ニ違反スルヤ否ヤノ点ハ暫ク措クトスルモ本提案ニハ左ノ諸点ニ於テ同意シ難シ

(一)該制度ハ日本人ニ対スル差別的立法ニシテ帝国ノ面目

上差別的立法ヲ認容シ難シトスル我伝統的政策ニ反ス

我政府カ先年來加奈陀ニ対シ「ルミュー」協約ニ依リ移民ノ自發的制限ヲ始終一貫誠実ニ實行シ居レルハ斯ル差別的立法ヲ未然ニ防止ゼン為ニ外ナラス

(二)該制度ヲ不可ナリトスル合衆国ニ対スル從来ノ我主張ヲ主持スル根拠ヲ失フ

不正入國者問題解決ノ為登録制度ヲ設定セントスルノ議ハ合衆国側ニ於テ我ニ対シ屢提唱シタル所ナルモ我ハ差別立法タルノ故ヲ以テ毎ニ強硬ニ反対シ来レルモノナルニ一度加奈陀ニ対シ之ヲ認容スルトキハ合衆国ニ対スル從来ノ我態度ハ之ヲ支持スルニ由ナカルヘシ

(四)該制度ヲ設クル必要及効果ニ付疑アリ

邦人カ米国ヨリ加奈陀ニ潜入スル例ハ是迄余リ耳ニシ

タルコト無クタトヒ之レアリトスルモ其数ハ極メテ少

数ノモノナルヘク之ヲ彼ノ墨国方面ヨリ米国ニ密入ス

ル者ノ例ニ比スヘクモアラサルハ推測ニ難カラス従テ

之レカ取締ハ現行加奈陀移民法ノ規定（不正入國者ノ訊問、逮捕、追放等）ニテ足リ特別ノ取締法ヲ立ツル

必要アリトハ認メ難シ

尤モ在晩、斎藤領事ノ電報ニハ脱船及他人ノ帰化証ニ

依ル不正入國者意外ニ多数ナルヤモ計リ難シトアリ若

シ然リトスルモ在加邦人ハ在米邦人ト異ナリ自由ニ加

奈陀ニ帰化シ得ルヲ以テ登録法実施ノ暁之ヲ逃ルル為

統々加奈陀ニ帰化スル者アルニ至ラハ登録制度ハ其本來ノ目的ヲ達スル能ハスシテ徒ラニ善意ノ旅行者等ヲ苦ムル結果ニ終ルヘシ

第二、対案トシテ我ヨリ「ルミュー」協約改訂案ヲ提議スルノ可否

「ルミュー」協約ニ依リ加奈陀ニ入国シ得ル移民ノ種類ハ左ノ如シ

一、再渡航者

二、加奈陀在留者ノ妻子

三、加奈陀在留者ノ呼寄スル家内使用人

四、組合農夫

五、契約移民（但シ之レカ移入ニハ加奈陀政府ノ同意ヲ得ヘキコトヲ条件トスルヲ以テ「ルミュー」協約以来

実際本項ニ依リ移入シタル移民殆ト無シ）

「ルミュー」協約締結ノ再渡航以外ノ新移民数ハ通シテ一ヶ年三百名ニ限定セントノ加奈陀側ノ要求アリタルモ我政府ハ之ヲ斥ケ其代リ家内使用人及組合農夫等ハ其數合セテ一ヶ年四百名ヲ超ヘサルヘキコトヲ約セリ

別添統計ニ示ス如ク大正元年ヨリ十年ニ至ル十ヶ年間ニ別添統計ニ示ス如ク大正元年ヨリ十年ニ至ル十ヶ年間ニ

九 「カナダ」ニ於ケル本邦移民排斥関係一件 二〇六

上述ノ如クナルヲ以テ「ルミュー」協約改訂ノ提案ハ之ヲナス裕取りニ乏シカラス

然レトモ今日我ヨリ進シテ之レカ提案ヲナスヘキヤハ頗ル考量ヲ要スヘキ問題ニシテ現時加奈陀ノ排日的氣勢ハ益昂リソツアルモ「ルミュー」協約ヲ廢止シ之ニ代フルニ絶對的禁止ノ立法ヲ敢行スル迄ニ差迫レルモノトハ認メ難シ我側トシテハ「ルミュー」協約改訂ノ提議ハ最モ

九 「カナダ」ニ於ケル本邦移民排斥関係一件 二〇七

公第三三五号 (十二月二十八日接受) 二五八

有効ナル対抗方法ナルヲ以テ日加ノ移民問題力今一層推
シ詰ル迄之ヲ保有シ置ク要アルヘシ

第三、結論

「キング」首相カ常ニ公平ナル態度ヲ以テ日加親善ノ為

B・C州ニ於ケル排日氣勢ノ緩和ニ努ム誠意並ニ苦心
ハ之ヲ汲マサルヘカラス殊ニ其提案カ専ラ對内政策ノ必
要ニ出ツルコトヲ内示シテノコトニモアリ我ニ於テモ之
ニ対シ全然無関心ノ態度ヲ取り難カルヘキヲ以テ前記第
一ノ理由ニ依リ一応其提案ヲ斥ケタル上先方カ不正入國
者ノ取締ヲ問題トシ来レルヲ幸ヒ我ヨリハ右取締ニ協力
スル為現ニ米国ニ対シ実施シ居ル如ク不正入國者ノ再渡
航及家族其他ノ呼寄ヲ禁止スル方法ヲ加奈陀ニ対シテモ
実行スル提議ヲナシ之ニ対スル首相ノ意向如何ヲ見ルコ
ト然ルヘシト思考ス

註 別添統計省略

二〇七 十二月十三日 在ヴァンクーバー 斎藤領事ヨリ
内田外務大臣宛

英國枢密院ニ上告ノB・C州闇令確認法事件

ノ審問開始及上告側主張ノ要旨報告ノ件

外務大臣伯爵 内田 康哉殿 在晚香坡 領事 斎藤 和(印)

大正十一年十二月十三日

(十二月二十八日接受)

審院ガ「ライセンス」ヲ一ツノ契約トシテ取扱ヒタルハ誤
レリト云フニ在ル趣ニ有之候
右何等御参考迄申進候 敬具
本信写送付先 在オタワ總領事

二〇八 十二月二十日 在オタワ太田總領事ヨリ

内田外務大臣宛 (電報)

日本人登録ノキング首相案ニ同意シ難キ旨同

首相ニ申入ノ件

第七〇号 (十二月二十二日接受)

在晚領事宛貴電第一号ニ閑シ

本官中耳炎ニテ引籠中ノタメ外出スルヲ得ズ漸ク本二十日
「キング」首相ニ面会右御電訓ノ内容ヲ語リ該電訓ノ摘要
ヲ内示スルト同時ニ区別立法ニ対スル帝国政府ノ反対及加
奈陀政府ガ現行法ノ範囲内ニテ例へバ我政府提案ノ如キ方
法ヲ講ズルニ於テハ政府ハ領事ニ訓令シテ及ブ丈加奈陀官
憲ヲ援助セシムモノト想像セラル旨並首相ノ態度ニ対
スル政府ノ感謝及同情ノ事情ヲ述べ區別立法中止方ヲ力説
シタル處首相ハ右ハ前回ニモ述ベタル通日本人丈ナラズ英
国臣民ニモ適用スルモノナルニ依リ区別立法トハ異ナル
國臣民ニモ適用スルモノナルニ依リ区別立法トハ異ナル

九 「カナダ」ニ於ケル本邦移民排斥関係一件 二〇八

(脱)従ツテ此点日本政府ニ於テ幾分誤解アルモノノ如シト
論ジ本官ハ一種ノ英國人即チ印度人ノミ適用アリトテ他外
国ヨリノ入國者全般ニ対スルモノニ非ザル以上区別立法タ
ルハ免カレズ而シテ此立法ヲ承認センカ訓令中ニアル三点
以外日本国内ニ於ケル輿論ノ反抗ハ政府ノ耐ユル所ニ非ズ
然ルニ一方加奈陀移民法ノ規定ハ含蓄広キガ故ニ何等カ適
当ノ方法ヲ見出シ得ベク強ヒテ新立法ニ依ル必要ナキモノ
ノ如ク思考セラル旨ヲ述べタル處首相ハ日加ノ親善ヲ最
モ痛切ニ希望セル自分トシテハ日本ノ立場モ充分諒解シ居
リ先般モB・C州首相ニ苦言ヲ申送リタル事情ナルモ何分
同州ノ形勢ハ御承知ノ通ニシテ最近ニモ州会ハ排斥決議ヲ
通過セル次第ナルガ日本政府提議ノ方法ハ大ニ考量ノ価値
アリ自分トシテハ或ハ之ニテ予期ノ目的ヲ達シ得可キ乎ト
モ思フニ付閣員ニモ相談スルコト可シトテ更ニ自己ガ
日加関係ノ親善ヲ希望スル旨ヲ繰返シ今回ノ事ノ如キモ予
メ事前ニ日本政府ノ意思ヲ尋ネタル次第ニシテ出来ル丈其
ノ希望ヲ容レ度キ積リナリトテ右訓令訳文ニ対シテ謝意ヲ
表セラレタルニヨリ本官ハ進シテ訓令末段日本移民出入事
情ニ言及シ之ヲ敷衍シテ排日論ノ謂無キコトヲ論ジタル処

九 「カナダ」ニ於ケル本邦移民排斥關係一件 二〇九

二
五

事項一〇 「オーストラリア」移民関係雑纂

二一〇

在シドニー 鈴木總領事ヨリ

豪州首相發言二闋シ報告ノ件

連シ当地方新聞論調報告ノ件

第四界

主電寫田号
2
上

首相ハ「ノーラン・テリトリー」開発ニ関シク同州ハ種々

意見發表ト歿シト同時ニ白瀬主義ニ效ナル Professor

クハ遺憾ナリ開発ニ要スル有色労働者ノ輸入ニ当リテハ専

各新聞ハ一斉ニ白濱主義弁護ノ論説ヲ掲ゲ居レルハ当然ノ

クハ市民権ヲ有セシムベキ精選セル亞細亞自由移民ヲ可ト

Telegraph へ曰ク労働党ノ如ク有色人種ノミナラズ白人

ニ属スルヲ以テ有色人種ノ居住開発ニ俟ツノ要アルコト一

独占三叉樹スルニ拘ハラズ僅少ノ人口ヲ以テ豪州全體ヲ貯

ニ於テ責任ノ地位ニ在ル者ヨリ斯ル議論ヲ聞クハ異トス也

醉江口不凡之甚外酒也未属大酒之列且以漫漫之閒空名

處ニシテ目下真偽取調中ナリ

一〇「オーストラリア」移民関係雑纂

渡船及憲臣移民累年比較表（加奈附）